

竹頭木屑錄

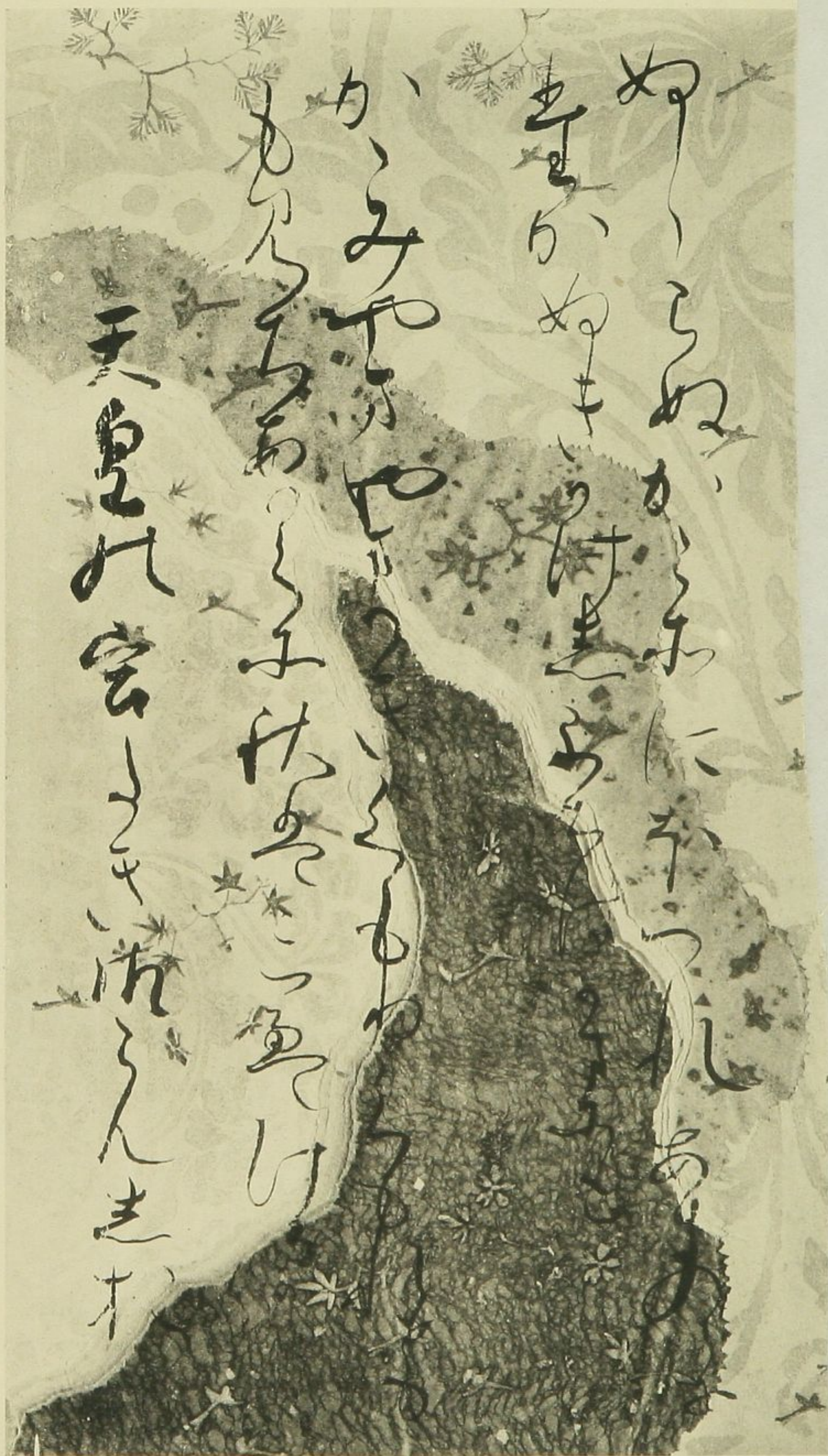
九

昭和四年十一月中迄起筆

特別
イ4
1919
417







竹頭木屑録九

昭和四年十月中浣起筆

176682

○文行巻之格之皇公文書一幅と獲分文云

為年頭 親儀大乃一腰馬代黄巻  
 扱為露五到耳悦思念之去月  
 十午玉西生浦着岸之雨尤又  
 弥希人数て之雨是流、官て以費  
 言、也

二月廿二日印

加藤全貞印







たものを、しないやうにせしめたのは本願寺ではないか、して見れば寄附金をしない罪悪よりも、寄附金をさせないやうにする本願寺の罪惡の方が重いやうに思はれる。そこに本願寺としての缺陷がないであらうか。

私共は信仰の上からは出来るだけの寄附に應じたい、然し現在の本願寺のやり方では一寸考へざるを得ぬ。

寺へは寄附をせなければならぬものである。僧侶には供養をせなければならぬものである、そのかわり、寺は寺らしく、僧侶は僧侶らしくして貰ひたい。寺らしい寺には喜んで寄附し、僧侶らしい僧侶には供養もし、無條件で寄附にも應じやう。現在でも將來でも、純なる寄附は盛にすべきである。

眞面目な僧侶に對して寄附

金を拒絶し、にがい顔をし、馬鹿にしたやうな少額の金を出すのは慎むべきである。寄附金勸募は盛にやるべし、但し寺らしい僧侶らしい僧侶でなくては應ずる事はむづかしい。

了ることハ其の者物か仲々ともうけ  
此方面に交際の開けることである。  
實ハ自分も、交際の極めを狭い  
まに早稲田畑を除いては格別交際  
も、亦敢て交際を開きたいと  
思ひ、其の著書が媒をせしめられ  
いろいろの方面に交際がひろげられ  
の人から書簡を寄ることも多う、或

横濱

ハ材料をよつて其の著書に  
毎月或る( )と書く人から手紙の来るの  
著書をも刊してからの事だ、其の著書も自分  
の趣味に投するものも定めて来るものもある。  
三重の西村徳大が山陽道愛の物瓶形  
の花瓶の二双を寄ることもや左朝野  
の如く知良が坂口正峯の鶴血石の歌を  
百顆の磁印に分刻して寄ることもあれば  
共念の入りは寄附か、其の共念を面談の  
無一人である。此の書物も寄ることも向い無  
論少くともある。著書も寄ることも方便のよ  
であるが、よく考へて見ると著書も自分もあ



に説くものあり。日夕往來しあひ人に談話を  
入るとも唯々多く常用を離れし止まり、自分  
の趣味や主張をいふ觸れは淡き事し、小橋入りの  
あつたりの。之れを交して著書の、自分の主張や趣味  
や性格を現ししものあり。随つて之れを削りて  
之れを削りしものあり。随つて之れを削りしものあり。随つて  
人の交際の根拠があるとも云ひ得るものあり。大抵  
の著書は、著書の千、衆知を求めしものとも云  
ふが、自分の物ゆえに抱負のあるものあり。其の  
るもの、自分の著書も二千位を著者がある  
から、多きが新刊刊振さるる交際と見えしもの  
あり。随著、類山陽、一萬からの購読者が



あつたから、一萬の交際を削りしものあり。随つて  
あり。随著、類山陽、一萬からの購読者が

十一月十五日記

○今年石川雅堂の没後百周年に當りては、  
忌と云ふべき際に出せし、六村園雅歌集、  
の友人の好む。此書は、中島左文の編纂に係  
り、序文を著すと、前年四書刊行会に編入  
し、之れを三首、その一、か、い、ん、の、更、ら、な、二、百、首、  
知く、之れを著し、四書刊行会、今日、雅堂の集を刊  
し、當時、中島に托し、之れを著し、之れを著し、  
此序、之れを著し、之れを著し、之れを著し、  
版の、之れを著し、之れを著し、之れを著し、  
雅堂、自分の、之れを著し、之れを著し、

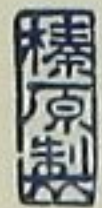






この口柄と値するものあり、雅邸の家の名義ハ  
糖屋と唱ふは侍馬河をさへあつてはさう  
雅邸ハ此の奥尾と稱す定規をさつたが、文字の才  
ある彼は雨つては却て仕人にあつたかも知れぬ。彼ハ  
ハ七十八才と生きながら、文才に遊んでる、師も長  
きと深つてゐる。

糖屋の存在といふのは、文藝の因縁があの如く、石  
川豊信といふ有名な浮世繪師の心あるが糖屋  
の娘にあつて世帯入りをした。雅邸といふのは  
去ぬの間、生んた子である。雅邸の狂歌が  
名譽を博したの如く、他の方面の事、若んて  
あつたが有数の者であつた。日文章、長し



此主人が公事端を言ひおたから、訴訟事件の  
相泊人といふ事であつた。お色といふ。今の代書人  
のこととく、止宿人のいふ、訴訟を言ひたり、井  
護士のやうに相南理宜をこけ回し、これ  
とあつた。悪あやと云ひ、やうな謝儀を  
強請した。いふ事、事實ハ雅邸自身は  
既知のこととく有つた。思ひのいふが、許人の言  
はつたこととく、巧み文を素つては、思ひ  
こと、或のあつた。又張り筆、福か  
ら未だ、災難と見る方があつた。わらうといふ  
あつた。存心業を禁むる家業を没収  
せん。江戸橋と云ふ、其後の事、の毒し











○大隈元侯と追懐する府法會と報ひ純と又の場から  
聯合して大隈分館の元侯四方者三開いたの一人の  
あつた。出席者の前頁の言を聞くにあつた。彼れに傍  
聴の者も一席に二七の人もあつた。彼れより府法會  
後のこの時から一時と傍聴いた。元侯の言を聞くに  
つては自ら口よりして申すに話も少き得無つた  
較り終るべきに大隈の純位こそきぬ。自人が伊豆府  
文正自宮の十四年一書に就て元侯の上奏文を  
被知るといふを大隈に示し、この書に書かぬもの  
に成るものがある。と叙し、以て元侯の純位の  
卷を興つた。元侯の言を聞くに、その頃自宮の陸  
宣公の奏議を後人がおれ、その節の元侯を傲つて

陸宣公

四六文作りのつた。無論上奏文で世の中は元侯が  
奏したと云ふてある。密奏といふこと  
此文を復め、ゆか、今と云ふ。目今に重復して大  
隈侯の私擬憲法を辭下し呈し、と云ふ。説  
かあるが、思ふに、此の上奏に附帶する憲法の大隈  
を誤り傳つてある。と云ふ。此の所を、  
去り私擬憲法といふ。然るに大  
隈侯が提出した憲法と傳つてある。よ、今  
此年朱利が共和の憲法の備き、  
此の憲法が元侯の言を聞くに、  
此の憲法が元侯の言を聞くに、  
人の言を聞くに、











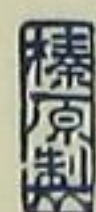


六村園用印

三村清光

此のふりかへりもつれも多し。

十一月念日記



原本解説

三十六人家集は大納言公任卿が選びたる三十六人の歌仙の家集にして、一に歌仙家集ともいへり。その三十六人とは柿本人麿、山邊赤人、中納言家持、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、在原業平、中納言兼輔、藤原敏行、源宗子、藤原興風、坂上是則、猿丸大夫、僧正遍昭、素性法師、小野小町、伊勢、大中臣能宣、源順、清原元輔、權中納言敦忠、源公忠、藤原清正、源信明、壬生忠見、中納言朝忠、藤原高光、大中臣頼基、源重之、平兼盛、藤原仲文、藤原元真、中務齋宮女御、小大君をいひ、その編者は今より一々詳かに知るべからずといへども、平安朝時代の末頃には既に成りてありしものゝ如し。各巻の歌数は多少一ならず、従て紙数も亦後に記せるが如く一定せず。

大谷伯爵家の藏本は現在せる三十六人家集古鈔本中最古のものにして、その筆者の推定し得らるゝは次に示すが如し。この書の製作せられたるは前に説けるが如く概ね平安朝末葉の頃なるべく、三十六人中兼輔の集は寂蓮法師の筆と傳ふる補寫本なり。人麿、業平、小町の三家集は夙くこれを佚して、人麿、業平の二集はその斷片世上に散見すれども、小町集のみは未だ壹葉も現存するものを發見せず。

原本の大きさは各冊凡そ縦六寸七分、横五寸三分にして、何れも粘葉綴なり。表紙は原紙の上に紗を張り羅を被ひて、金銀の模様を畫き、表紙の左端、裏表紙の右端に竹片の發裝を添へたるは、作製當時の装幀なるを知るべし。用紙には陸奥紙、唐紙、厚様、薄様、燒畫紙、紙屋紙、蠟牋等を用ゐ、これを以て所謂裁繼、破繼、重繼としてこれる表裏に活用せり。重繼とは薄様を數枚重ねて衣の襲の如くせしものにて、其他に厚様を以て山水の様、洲濱の趣などをあらはし、さらに金銀、群青、綠青などを以て花鳥に草木に、蘆手畫にこれを修飾せるあり。而

テ 眞

集

内、白、四、枚

傳、定、卿、の、居、ま、せ

丁、新、羅、身、七、丁、目、録











○亡友有賀長雄の息長崎兼接先考の考の女の著述と傳へ全集を出せんとするの志あるも資金を乏し得ず為りて長雄の友那在留の折其全集の金を振本を賣つて資金に充んとし余は内旋を依頼す余試みず其の振本の少なるを以て其の推し世帯の田畑を免す其數八百程と起る自動貨車一台を要すといふ其名のよの女を難しきとあり長雄が友那に於て得たる俸の或人と此の全集の注と其し其といふ彼れも意外の風味にかひん也余は振本を以て深山傳へて賣るの困難なるを説き若者の出故に自から着すの不利を説き自から縁約者と或る程も近き書物として出版せしめんと説く

河津

吾可

十一月廿〇日

幸田光亨印

荃 荃



同上

西面源惟良

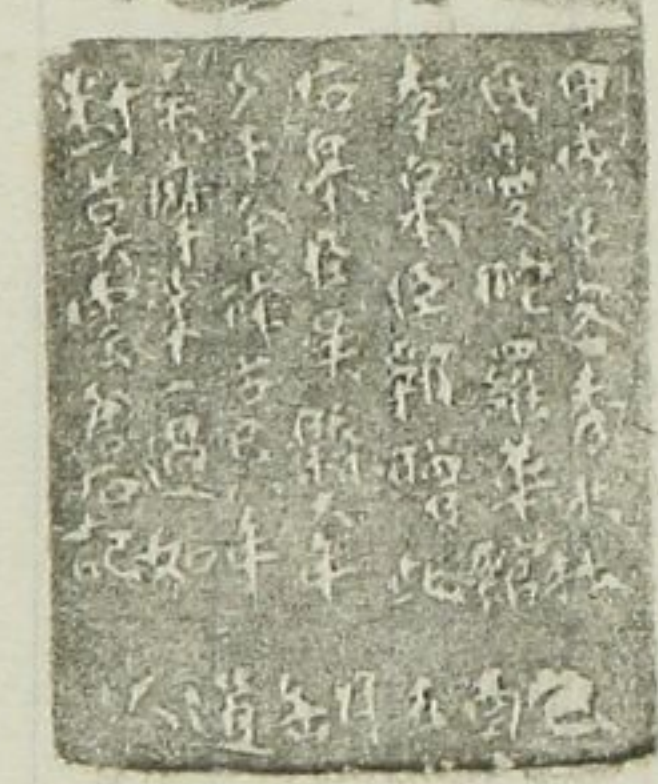


山東

二山



長倉碩



長倉碩之





和落

昨日の終日暇福を待たし定むるは片付た是れ感とて  
印を多し下相をすしはし

至る下七西落

幸田光隆字子棟幼名急吉改内藏号西落一号

西河頼信が相と記すは山田史後断山田信幸指し  
外史、まがひ

方任史崎文庫と識所を云ふ日知子船二十卷

若柳のうらふ谷川士信の句玉考と云ふ此人は

寛政十年七月十六日歿七十四歳 其光其小此

光其の取之は美富先生刻と所括也

大田原と記す

其は礼中と云ふ以所をすしはし

三村信を

中崎を傳はす

是れをす

家元の印は西落釣竿と云ふ其是れ刻の印あり横  
井時冬歿後余の年す物すはし取すの識後  
川西落何人かと云ふは別紙附記す







じ土氣が彼れに如き一程の味を出すの地。

○文藝春秋の新年號に、雪の宿を頼まんの  
む前掲のすまをを書き、東京が女の人家柳家  
か土と像をよつること、大穴笑後の東京後  
い他りの笑言を述べ、是れのこと、地方を押し入  
るよを初節すまきこと、おらの土の境、  
こと何あまを捨て、地を親しむ時、  
東の修羅地に来る土くさきを、  
いこと、土の香りを、  
が大穴、

○福屋日記の新年友を、  
稿と頼んて来た比、  
酒豪傳のやう

酒豪傳

あるのを、  
年、  
注文を、  
さ、  
つ、  
の、  
ハ、  
ら、  
か、  
二十

○相崎自身の里言は、  
へき地を、



### 隨老古

宇都宮

二、娥眉山標木評判の事  
 「娥眉山下橋標之記」を以て、  
 日報に連載公にせり。時に市島  
 五十嵐の諸氏より御懇書に接せり  
 此處に改めて感謝の意を表す。  
 時に市島春城氏の書中にも見ゆし  
 如く、かの娥眉山下橋標木が一時  
 大江戸の評判となり、各藩侯が競  
 りて大勢の供勢まで連行して、  
 小藩の権臣に拜覽に出かける  
 騒ぎ、はては大藩主の接待に面喰  
 らつて開帳を乞ふ向きへは、出張  
 して御開帳する様に改め、それが  
 ために進臺まで作りたりと云ふこ  
 とであるが、標木の所持者長友村  
 山龜翁氏より去る四月二十三日附  
 を以て書信に拜接す。失禮ながら標  
 木の文獻として公開する。氏の御  
 了解を乞ふ。

拜上村郷に鶴見に東京に墨々御  
 狀に拜接候。感例の疎懈一向に  
 御返事もさし上げ不申たびく  
 幸に御寛恕を得ば欣懐之に過ぎ  
 ず。採過日は娥眉山標木の御記文  
 御上載の楳嶺日報御覽々御恩送年  
 下ありがたく拜讀御文章もや、  
 御上達まことに近來の會心事に  
 御座候。御記文中真摯闊御遊  
 ことも正に拜讀山廓の草園大  
 兄によりて史詩化せられたるは  
 幸甚に候へさて又々最近の御狀  
 にて娥嶺の字面に就きそのいづ  
 れが正しきか内示せよとの御旨  
 服承由來謂はゆる漢字通なるも  
 のはなんのかのと一理くつこね  
 あげねば納らぬものと相見候。娥  
 眉にあらす殿肩也など、頑張り  
 居り候へども曾て小生が銀鏡第  
 二輯中(同誌一六〇頁御參照の  
 こと)に申し述べ置候ことく  
 ガをもつて肩に配する方當識的  
 ことと申す。

### 雑記(二)

黒岡 栖策

なるべしと思ひいたし居り候。  
 現に大兄も親しく御覽のごとく  
 小家の標木にも明らかに方眉山  
 とありかゝることは餘り六かし  
 く御考へにならずに直感的にガ  
 眉の二字御採用然るべきかと存  
 じ候。しかし申す所は、突き  
 込んだ字源の解釋が御希望なら  
 ばこの道の専門家にたゞし詳細  
 御答ひ可申上此邊御遠慮なく御  
 内示たまはり度候。あの標木が  
 當殿江戸府下の大評判となり諸  
 侯伯の権臣に一覽を求むるも  
 の顯出してそれがために小藩の  
 権臣大いに面喰らつて示來御  
 開帳に改めたることは市島春城  
 氏の御手紙のことに相見候  
 が正にその通りにてこのことは

昨夏真觀堂に御來遊の節小生上  
 り精しく御話し申し上置候。や  
 り記憶いたし居り候。これは大  
 層おもしろき逸話にて標木の老  
 古的價値にも影響するところ少  
 からずこのこと御記文中に洩れ  
 たるはちかごろ遺憾也なほ此の  
 御開帳用「つり臺」は目下小家  
 に見當らず按ふに権臣侯より拜  
 領の節標木のみにたゞきてつり  
 臺は権臣侯邸にとり置かれし  
 ものなるべしなにして興味  
 ある逸傳には候はずや  
 御書屋用額面揮毫のことこれま  
 た拜承遠からざるうちに一筆し  
 て叱生を仰ぐ可候。乍延延御  
 禮を兼ね御答へまで小生は毎火  
 曜に手紙を相認め候。ことにい  
 たし居り本日はこれにて十二通  
 に及び筆端いさゝか相つかれ申  
 し候。御覽被下度候。草々  
 昭和四年四月二十三日  
 村山 龜翁

東のふり中入自念如里君と考へ此方中：思ひに  
 とか載るるふ、まゝの権臣侯の存ひあつた娥眉山下橋  
 の標木：純くあつた。此、橋標の今村山龜翁の  
 もつてゆつて居ると考へし、おのれに記す中此考し  
 及んぬるから、こゝに切り抜きを収めて置く。  
 ○郷里の書懐より白雪先生墓誌の標本紙を尋り  
 未だ、白雪先生は先代河内所領前市島家の祖日  
 一と余の家祖地は海防の兄、此碑、此は海防の旗  
 幟、傳り碑、いふ、市島家、昔内より、余は、年  
 一雨碑、紙本を得て家、此、標、紙、子、壯、衣、袂、し、あ、る、こ  
 く、不便也、此の、紙、本、紙、子、壯、衣、袂、し、あ、る、こ  
 事、ふ、心、し、重、寶、を、磨、り、貯、を、受、る、所、以、也





○昨々散策中一文行巻に於て一二の圖方を購ふ  
稀地極度の御本手行

大谷軍記朝解書 五冊

寸紙三枚抄横帳に細方しあり冬表  
紙に楕圓形の極痕長士印あり二ツ  
折して袋に入らる代巻の表あり極  
痕自身事此の御本の誤りせんやとい  
つはか未だあるはず

信長記

八冊

活字本とて其長の面目をあらんも  
意承とせんハ誤りあり大形本也  
此活字本とて稀に物ありハ三枚

を漸く其日雨湿の痕跡あり家元  
存の量臣記あり古版にせん併せ  
七葉中より置くへし 土月林也。

○世に鳥羽勝心の繪とて有名なるものがいくつもある、  
在屯の佛畫のものと、歌畫のものと、保元平家果一  
寛範の草子ひあつた確証とを尋ね、極稀の時代  
の古筆繪を家元斯く考へて思ひまゐらば、  
ある山の畫家か、或は平家系に確定した所を  
扱ふと、佛畫の別として、勝倫、志貴山縁記、高山  
寺本歌畫四行、筆も極細記、非平家本成佛  
とて、通例鳥羽勝心筆と云ふてみるに、中



劉彦士夫人の筆目と云くえんういふのがあること云  
あともあるし。服指をその考証から鳥羽僧正の  
前のものと見らるべきことある。亦僧正の時と  
七通か。後のこのと思つる。唯多考未成。佛を  
もある。まを時代辨へず。皆鳥羽僧正の  
筆に物してある。又温言七考し。或は件大納言  
冷書をも鳥羽僧正の筆に物するものあり。又  
辨し。此冷書と志貴山縁記とを先長考す。とす  
ものもある。古筆家が何故に時代辨へず。鳥羽  
僧正の筆に物するものあり。古今書又集。僧  
正の性癖也。修し。朝この意見。うど。か。散見するの  
こと。ま。考。撰と。望。い。の。考。め。と。ぬ。と。云。ふ。説。也。

あるが。或は辨へん。保し。影りぬき。勝るげ。記す。か。ら  
受。献。の。も。と。未。ま。る。の。子。散。り。大。膽。な。推。定。と。云。へ。れ  
か。る。ぬ。勝。冷。を。他。の。款。書。か。あ。る。か。と。い。ふ。と  
受。献。を。没。書。家。と。定。め。鳥。羽。僧。正。の。視。と。す。ま。ま。心  
つ。て。い。ひ。休。の。限。り。と。云。い。や。す。を。得。ぬ。古。筆。家。の。推。定  
の。杜。撰。ま。ま。今。更。言。ふ。ま。む。し。ま。い。が。鳥。羽。僧。正。の。因  
習。的。に。受。献。を。考。へ。ま。る。と。疑。を。許。さ。ん。と。い。ふ。近。し。ま。つ  
て。あ。る。と。い。ふ。ま。い。と。い。て。よ。い。ま。の。其。の。筆。法。の。如。く。物  
ら。す。心。の。時。代。の。如。く。物。ら。す。僧。正。の。筆。に。物。と。い  
ふ。の。い。僧。正。の。名。大。ま。ま。あ。ら。う。が。其。の。心。意。に。違。つ  
て。ま。ま。大。一。と。い。ふ。こと。に。ち。う。



危機の徳川家を救はれた

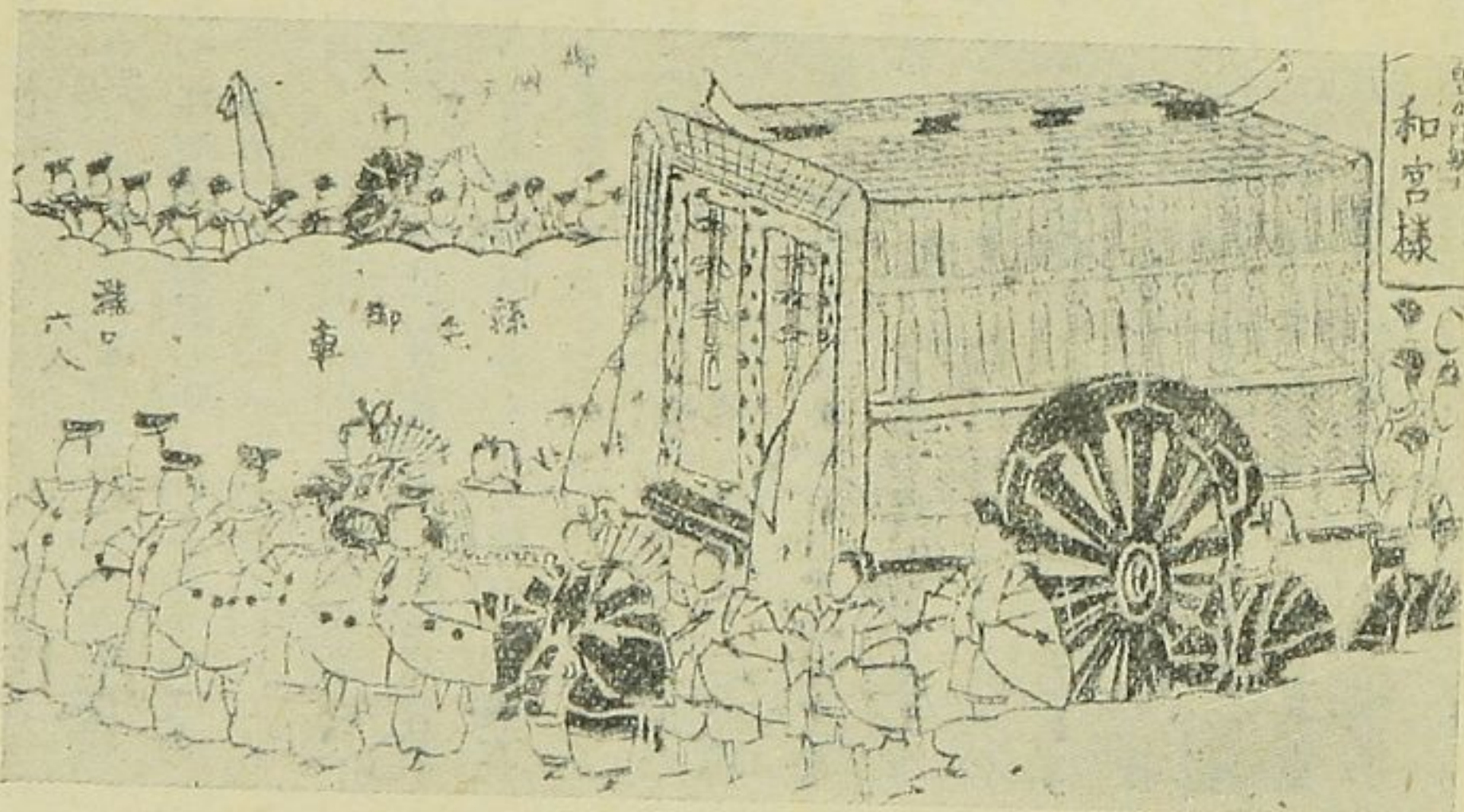
# 和宮の御事蹟

早稻田大學名譽理事 市島謙吉

箱根塔の澤の環翠樓地内に、阪谷男爵撰文の碑が建てられてあるが、これは和宮様御終焉の地を記念するために、宮の御事蹟を刻して建てられたものである。昔から婦人て世の根本となる人は、まことに少ないもので、學問のあるものも必ずしも貞淑であるとはいはず、貞淑であるからとて、必ずしも大事に際して、それを處理し得る才能を持つて居るとは限られない。殊に日本は古來の習慣として、諸徳を備へた婦人でも表面に立つて働かぬといふことを、わざと避けて居つたため、今に知られて居る婦人といふものは一層少ないのである。この少ない婦人の中にあつて、和宮様の如きは、その行跡は天下の大勢に重大な關係あつたのであると同時に、宮様御自身は、その時局に直面して、

御活動なさられるだけの能力を十分に持たれて居つたといふ點で、御推稱申し上げ、婦人の根本となるべき立派な御方であると申される。和宮様は、孝明天皇の御妹であられ、明治大帝の御叔母様にあたられた方である。この方が六歳の時すでに有栖川宮家と御婚約が出来て居つたのに、それが徳川家へ御降嫁にならなければならぬ事になつたといふことは、當時の事情已むを得ないとは申せ、これは全く政略結婚の犠牲となられたのである。政略結婚といふことは戰國時代には、度々行はれたことで、人質の意味で行はれた場合も少なくなかつた。これが和宮様の場合は、當時幕府の勢が衰へ、一方に於ては外國からは種々の壓迫を受け、國內では幕府

を倒さうとする計畫が盛んに起り、尊王に或は攘夷にと、何時日本國內に戰が始まるか知れない、といふ危急の時であつたのである。そこでこれを救ふには、どうしても京都におはす朝廷の御力を借りて徳川家が國政を行ふのでなければならぬ、といふ議



論が起つたので、十四代將軍家茂に和宮様の御降嫁を願つたといふ譯で、和宮様はその犠牲となられたのである。宮はこの時御年僅かに十六歳、まことにお氣の毒な事情で、殊に女性としてはまた、これ程悲惨なことではないのである。元來關東と京都とは、風俗習慣が違ふ上に、殊に禁裏御所と武家の風俗とは、甚しく違つて居つた。單に異つた風俗習慣の所へ縁付くといふだけでも、なかなか苦痛であるのに、京都では、當時江戸は外國人が横行して居るときへ考へられて居つた位であるから、宮中深く立籠つてお育になつた纖弱い御女性に、江戸に行かれるといふことは、女の情として恐ろしかつたことに相違なかつたことであらう。さて御降嫁といふことが愈々御決定になり、京都から木曾路をとられて江戸に御着きになつたのであるが、その御旅行中の、宮の御歌に

すみなれし都路出て、今日いく日急ぐもつらき東路のたび  
落ちて行く身としりながら紅葉の人なつかしく焦



れこそすれ  
といふのが残されてあるが、この御旅行はどの様に御辛ひものであつたかが、お察し申上げられるのである。

徳川家はその時、宮様と同年の十四代將軍家茂と、前將軍の未亡人とが居つた。この未亡人天璋院は薩摩の島津家の出て、その性格はなかく男勝りの剛氣な女傑であつたのである。

さて御降嫁になつた和宮様が最初に、母として仕へべきこの天璋院にお會ひになつた時の様子は、天璋院は廣い座敷の上座に三重の座蒲團を敷いて、傲然とその上に座し、遙かな下席に蒲團もなしに、宮が坐らせられたのである。即ち始めて姑に目見えをされたのである。これは普通の身分の人であれば當然のことであるが、陛下の御妹としては、あまりにも違つた仕方だ、皇女に隨從して江戸に下つて来た多數の侍女達には、如何にそれが辛かつたであらうか。皇室から見れば武家などは眼中になく、婚家とはいへ、徳川家の未亡人などは、いはば臣下である。が然し嫁した以上であるから當然のことではあるが、皇女としてお育ちになつた宮として、この様な些々たることにも心をくばられ、臨機計ひをされたことは、全く賢徳と聰明によるといはなければならぬのである。

勝海舟翁の書いたものによると、天璋院と和宮とは初はお間柄が悪かつたのであるが、ある時、海舟翁の邸へ、このお二方がお成りになつたことがある。その時御膳が出されたが、お二方とも互に譲り合つて、おあがりにならぬので、お給仕の者が非常に困り、その由を海舟翁に話した。そこで翁は、

「そんな話らぬ御遠慮をなさるのには、御櫃が一つであるから、御自由に召上られては」

と申上げて、別にも一つ御櫃を供へられたところ、お二方とも

「安房（海舟は安房守であつた）は利口者だ」と大笑ひをされ、御退出の時は同じお馬車で、仲よく御歸りになり、其後は何事も親しくお相談をし合はれた、といはれて居る。

はこれも致し方がなかつたのである。

和宮様は天稟まれに見る女性の美德を持たれた御方であられたので、この天璋院を母として尊敬され、夫將軍に對しては勿論貞節を盡されたのである。そして武家の風に從はれ、何事も自らを制して質素を旨とせられ、錦や綾を斥けられて、粗末な木綿の着物を常に着用されたと傳へられて居る。

宮の御聰明であられたことは、その三十一年の短い御生涯に、よく現はれて居つたことと、或る時天璋院、將軍、宮の三方が吹上の御殿にお成りになつたことがある。その時三方がお庭へ散歩にお出にならうとした時、どうした行き違ひか、宮と天璋院の下駄が踏石の上にならぬ、將軍の下駄は下に置いてあつたのである。これは非常な不敬とされたことであり、これが表沙汰になれば罪人を出さなければならぬのであつたが、その時宮は早くもお氣付きになつて、御自分の下駄を跳ね退け、そこへ降りて、御自身將軍の下駄をお取上げになり、將軍にお辭儀をされたので、何事もなく無事に済むのであつた。これも夫に對しての努め

和宮様の御降嫁は御年十六であられたが、それから四五年にて幕末の大變が起り、夫君家茂將軍は大阪に行かれ、そこで急に亡くなられた。それは宮の二十一歳の時であられた。大阪に於て將軍が病篤いと聞くや宮は神佛に御祈願を籠められ、御鹽斷をなされ、身を以て代らむとまでなされた程で、その至誠の程は涙ぐましいものであつた。然しその甲斐もなく、いよいよ薨去の報を聞くや、直ちに縁の黒髪を断たれ、弔歌

三つせ川世のしがらみのなかりせば君もろともに渡らましものを  
と詠まれて、黒髪と共に大阪に送られて、棺の中に納められたと傳へられて居る。

また將軍が亡くなられて、手廻りの品を調べた時、宮から將軍に宛られた手紙によつて、和宮が徳川家のために生命を賭して殉ずる御覺悟と、御夫婦の御愛情のいかに深かつたかが、始めて解り、侍臣一同を驚かしたのであつた。

和宮が未亡人となられてから間もなく、御兄孝明天皇が御登遐になり、徳川家は瓦解し、官軍は江戸城明



渡しを迫るといふ大變が、次ぎ／＼と起つたのである。その間に京都の御所からはしば／＼宮に京都に歸る様にとの勅命があつたのであるが、

「一度嫁した以上は、身は徳川家のものである、死んだら京都に葬らず、必ず徳川家の墓所に葬つてくれ」といはれて、その後は天璋院と心を合せ、あくまでも徳川家を救ふことに御力を注がれたのである。

十五代將軍慶喜公が大政奉還のち、一時色々な手違ひから朝敵となつたのであるが、これを宮は非常に御心配になり、或る時は女房頭を京都の御所に遣はし、或る時は官軍に出すなど、一念徳川家を救ふために、御自身非常な複雑な政局に携られ、その行ふ所はお年若てあらねながら、四五十の人も及ばぬ老成した御才略を廻らされたのに眞に敬服の外ない。

和宮御降嫁の當時は英國を初め、諸外國の軍艦が我が國に來て居つて、何時火蓋を切るか知られない。それからこのち、勤王の志士は徳川家を亡ぼさんとして居る。この様な時、公武合體の犠牲として徳川家に入られた和宮が、身を挺して亡びんとする徳川家を救はん

としての御苦心と御努力は、如何に大きいものであつたか、幸にも和宮の書かれた日記、手紙、和歌が世に出て、その御眞情を知ることができたのは喜ばしいこととて、今日國家は安泰に、徳川家は榮えて居るのを見る時、この若くして徳操、才略兼備の高貴の御力が如何に大であつたかが知られるのである。(談)

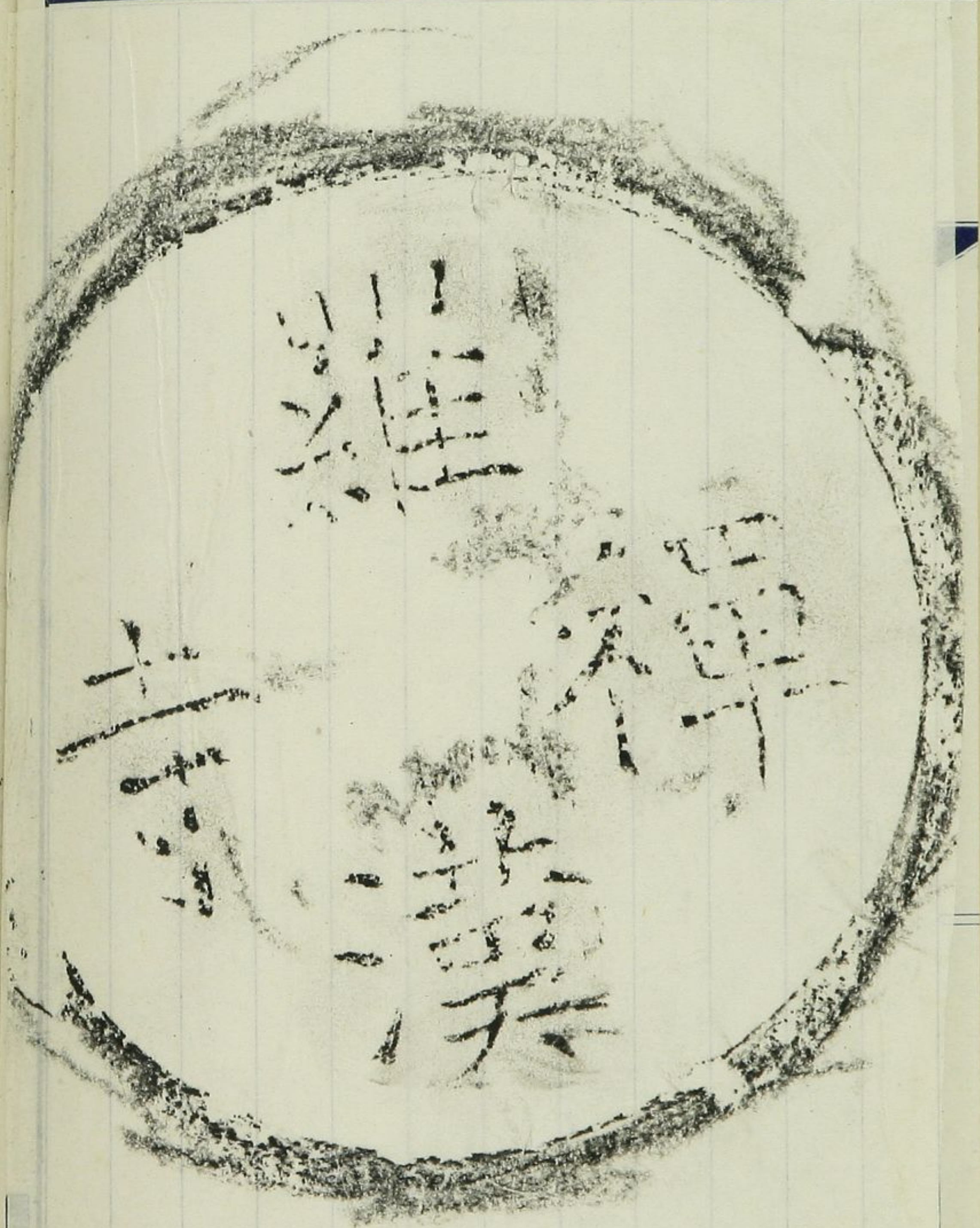
(第九頁寫眞は、和宮御降嫁行列の實景)

(第七頁より續く)

其他この緊張の心持をもつて、もつと小さいいろいろの事を改革しました。今迄ならば買つてゐたものも、買はずにすませたものも澤山あります。私は緊張録といふ小さな帳面をこしらへて、これに時々思ひついで實行して居る事を、後の參考にも思つて記してゐます。果してどれだけの緊張味があらはれるやら。私の學校の生徒は皆この帳面を持つてゐます。心の光と名づけてあります。私は皆さんが懸命に節約勤勉を實行される事を望みます。どうか未來の妻となり母となる人、殊に未來の家事科の先生となられる様な方は十分御努力あらむ事をお願い致します。

早稲の刈取の女工の苦勞の甚しき撰り記  
婦人の行状を載せたいと編輯者の求めに  
で余の逸事から録しなすべしといふか  
ある但し誤りか一二ある、若根の環おき梅  
を終焉のやとるべし其の二は訂正を  
要す





の尾作の燈の次流の向く日本に権利の二字を使ひ始  
めたる又也蘇祥がう井りやん、マルキ一の友が海萬  
圓公法から棟つれりから如もろもあるといふ也。大徳院  
が長崎の法羅一とことが南時目不見いともあつて外  
人の評判が横濱に傳り、横濱にありて「カ」を  
尊しといとく大徳院をあらわす。こゝんが大徳院か  
つて、二考のれ比ふ初が大徳と考のてあるが、そ  
んじある。大徳の次四五と也 肝臓病に罹り可る  
リ重態であつて、當時の中外評論する國家  
の端の秋に此人を考あといふと、出と考の、日海  
も考を揮つてある。清世幸の時大徳の端の  
寺を訪ふに於て主僧北山ある、物と考を傳ふに於



例の如く詳しく一行に川の他は有るがゆゑかき見  
頼めと云ふはと云ふ。明治二年官軍公選を艦  
の御前で行ふは時三條公が執事と云ふ。岩倉久  
保が四十票あり大隈が三十九票ありと云ふから  
人氣が云ふはつはこと心で観んぬ。久米邦武と大隈が  
若い次時と議論をやつた。ある時大隈久米二人  
の精神は何れの家にならんと問ふは時久米は心  
りと云ふたのを天つて見んまふことと云ふを休  
めより精神の動揺ありと云ふは久米を致を  
取つた。横濱の造船所を經營しつゝ小栗上杉  
と云ふ。小栗は時久米の代人と云ふことを知り  
當の悲愴の言をばかして曰く。家をを棄てよう

七土花のあつた方がよく云ふはつゝ善し造  
本をいふはつゝある。由利公正一時は勝をひきつ  
か藤式の妹物家と大隈の敵ひをうらむ。係し  
西郷の之れを飽きも信じて海軍に對し由利  
の暴を元つて大花の新しき有る。若くは抗し産の  
威力を以つて相争ひ三時をんたり。井上ル連を率  
へて大花有由に入入り。西郷が大花の御用掛と云  
つはつゝの頃の音の親が云ふ。まゝの明治四年の  
つは。西郷といふ人ハ人柄の隘別は無開の人と云  
ふ。誤つたことか。方々ある中。清田出を以て考の  
考材として大花を推考しつ。此を考す。次官の如  
うに位下。振くはつ。一向に働かぬ。其の故也







こと大隈の憤怒を以て廟を二面倒を犯し  
たり其處の者尙二三の事あり木崎三条  
ハ大隈をも久光の國誼を説きしめ  
人とししむ大隈の流ししるも馬津を往訪  
することを旨人せしむるは馬津と大隈  
二條方に出分ひしる處の三條の公状を  
通  
馬津が大隈の敵視を以てしるに爲し大  
隈ハ三条岩倉倉三宛て何故に辭してしるを  
得しるか其の理由を詳かきせよとせしむ  
と論じしる書一書ハ三條家ハ爲ししる  
七場：現るる

一 大隈が民部大輔と大藏大輔とを兼任し  
ること故に其權力集注すとすも久光等之  
ハ抗論ししる結果大隈の双方を罷めんと  
ししるを木戸ハ聽いし大隈怒りしる時  
の民部少輔伊藤博文ハ大隈ハ罷  
する者尙一也  
三条の手紙より大隈が大藏大輔と兼任を  
喜ぶの一事  
休々木戸の書ハ三条の手紙より民部少  
輔の書ハ大隈を罷めしる大隈を奉迎し其  
ハ以権を失くする大隈を説き大隈は



の百人物の政府に献きこころをいふて賞賜を  
ふすれあり

市時大隈侯の勢力の大ききことを窺ふ  
べし

一 明治六年九月 小幡善助東京府前知事  
の時の東京府知事小幡村正の志望を  
せしむる政府に認めしむる小幡村正の  
山崎角三を以て換村を認めせしむる  
ことにつき三益の手前あり、この一時は  
の副知事なり

明治六年九月

一 條約改正市時、市商中の明治廿二年十月  
里田の大隈と考へせしむる市商中の  
山崎有明の志望を認めしむる政府に  
認めしむる所あり、百人換村に出すべし  
談判するの打合あり、此の事あり

一 同里田の手紙に伊藤博文宛に大隈侯  
長を以てするの件につき、山田大輔をして伊藤  
を説かしめん打合をせし、多ん寺に拘り  
改訂する、雖も、此の事ありと認めしむる

一 二十一年一月廿七日大木の大隈、市商中の  
中大隈の外務大臣に認めしむる其の就任談



税の物と四境<sup>三世</sup>、皆中ノ湖内各ノ我主  
義といふ語あり、如効ノ語解を根くと  
して云々する書状あり

一 二十四年十一月十日大木の方帳ノ字を以て  
状ニ大隈が根柢願ひ有る位地を以て  
函を呈旨候様位と自邸へ公見し  
不謹慎を咎め皇上委任を以て諭せし  
しめり病の所を以て辭すべしと云々  
大隈侯の返書辭しり

一 明治五年甲辰春大隈ノ定りて書きたり

岩倉大使勅使使林有礼に米四と條約納印  
の全権を興へんことを電報すぬる政府之  
んを研さん條約の交渉に於て各回と同時  
に納印すべしとて委任状を興へたりし下  
に記すの事あり

一 佐賀藩民の奇商ありある内二もは前振使  
拂下を非とす文も奇商の執心を及ぶ  
論あり一もは中止と主張し一もは物と稱  
巡幸供進の出発の地ニ定るも、拂下の撤廃  
を紀多と先づ三条伊弉ノ其地を運搬し  
この間中の事ありと湖内の奇商ありと記す



第の大臣大臣の事

一 三十一年六月十一日佐賀の手紙より、閣下の憲  
政を主として内容と組織するに及ぶ、及吏  
の選叙と慎まざるべしと説く

一 尚書高橋者新設に付て大隈、客を以て  
閣下の考及其人を以てえんべし、及けざるの儀  
るに是れかすと説く

一 明治十二年 佐賀の手紙に、侍藩副藩経  
が政府の機密を漏らすとを別途に外おせし  
めざるべし、聖旨に依りてんべし、及んば  
入んが、農会に説いて奏上せしむる、及んば  
りて説く

一 明治七年六月大隈の所職病ニ依りて三原公  
氏辭職を呈出せし事、三原家・文者  
中より、佐賀の次次此病に對し、  
りて説く

一 明治七年 井上高孝の考物に、  
と示し得ず、  
三井社と大隈に托する、  
りて説く

一 明治三十年三月加藤高孝の考物に  
其女皇六十年祝典、有柳の吉野差を







# 紅葉忌と其思ひ出

小林 躑 月

## 多情多感の俳想

死なば秋露の千ぬ間を面白き

一代文豪尾崎紅葉山人が此のいたましい辭世の句を貽して逝いてより、もう二十八年の星霜を閲みする。ついで此の程(十月二十日)も山人と親交あり、且つ俳句の因縁淺からぬ人々が數十名半込俱樂部に集つて、紅葉忌の句會を營んだのであるが、山人は俗に云ふ極度の凝り性の人であつた丈に、單にその小説の上のみでなく、句作に就いても普通人の十倍二十倍の苦心と努力とを以て、てにをはの一字一句たりとも苟くも爲ないので勢ひ多數人の集まつた句會の場合などでも、締切の時間に會はず、時としては自ら出句を棄權して了ふほどの眞劍と自重と熱誠とがあつたのである。従つて、その出來上つた句を見ると、云ふ可からざる深味があつて、そして練つた想と材との廣い大きい優れた超絶さが認められるのであつた。つまり山人の句を一讀して後で、靜かにその句作の基調となつた點を想像して見ると、何か知らんそこに考へさせられる一ツのものが頭の中へ浮んで來るのである。或る方面の人から云はせれば、山人の句は餘りに考へ過ぎる結果、情味が勝ち過ぎて、俳諧のさびしほりに乏し

く、ともすると考へ落ちに墮しやすいとの説もあるが、そこに即ち山人が小説家としての多情多感なる性格と工夫努力の構想とが窺知せらるゝので、僅々十七字の短簡なる一句の中に、あらゆる人情の機微……極致……長所短所……血の滲むやうな深刻さが會得さるゝのである。故に山人の俳句は、その一句と雖も時に或ひは、百頁二百頁の長い文章と同一若くはそれ以上の價値があり、それ以上の情調が織り込まれてゐるのである。鳥渡私の諧んじたる句丈でも、

いかやうに霞むかと丘に上りけり  
散るそばに牡丹の魂の迷ふ哉

乳捨てに出れば朧の月夜かな

白桃の仙ならんとす月五更

吳竹や伏して奏ずる雪の瑞

炭取の底に貧しき落葉かな

澁柿のその葉にめでよ承露盤

これ等の句は、何れも山人の遺吟中でも秀句として有名なものであるが、その何れを讀んで見ても、自然の風物と人間の情味とを對照と云ふよりは、寧ろ融合化せしめた所に文豪苦心の痕跡が歴々として見らるゝのである。殊にその「散るそばに牡丹の魂の」の句や「炭取の底に貧しき」の句に至つては、作者その人の主觀から來た眞に徹底的極致の名吟たるを失はぬのである。何人もが云はんとして云ひ現はし得ざる所を道破し去つた感さへもあるのである。

文豪も生活の痛苦

○尾崎紅葉の跋(一)廿七回長とある、硯友社  
と三張其の跋底の催しが這俾今をひらくこと  
とろろ、海濱今をひらくこと且つ遺る遺る(一)の底  
讀みもを催しし、毎自分も海濱を待ひまゐる  
うこ(一)き江見おと流岩谷波とせし思ひ出を  
待つた。聴衆の心とつる人：満ちぬる盛分はあ  
つた。度々自分も人を以てて垣か垣か  
こわい。去品の海濱にありて一帯を變へ  
れ  
自分のおもひを、靴をえら思ひ出を待たれこ  
とかあはくあるの、多くは人を待たせし  
んか唯れ自分の前席江見おと流岩谷波







く、ともすると考へ落ちに墮しやすいとの説もあるが、そこ

思ふに物つと糸のニ味縁に、来いちやくびニふじま  
えんじ。まゆも来いちやくびだまうま糸かじと青いの  
ハ此處にあらうと云ひんてある。山人ハ澆厚の糸が  
ぬきをあらつたを、信濃の方言に来んと云ふ  
来いちやくと云ふから澆厚に引かけし地の  
吹と云つたと云ひんてある。山人ハ小木ハ十号澆厚  
車しもの懸ち了所があらうと云ひ。お糸ハ其後  
阿佛坊の妙宣寺に職を継ぎ、十二年百佛坊  
生活をやり、死にぬれ今もいふ年前十木  
糸といふ物に似し像し、徒糸の其的七十四年  
といふ此の糸ハ今婦人今子の袴すしとつとめ  
ある。誰んかえし七號婦人といふが山人ハお糸人

たけはぬまのものを地り出しとある

○此糸四號合の席に正合現希板の流か出た時  
亦村老雲が正合流うら、シヤボンがあらうまう  
ゆといふと香ハ糸糸まがえんを不いとし、糸脈が  
シヤボンと誤えんたといふた。まんじ七號糸干の  
時此の糸脈が様：附着してある所へ掃除の糸  
かえんを解かして誰んかすへつたことがあらうとシ  
ヤボンと云ひ立て此のが誤解の元たと言ふた。そ  
の糸脈ハ孔か穿つてあらうと紐が通つてある  
と云ふた。之ハ親を克く言ひ、語ハ字ハ今もまシヤ  
シとばかり思つてある。千二百年前ハ改メシヤ  
ボンかち、まんじ紐が通つてあると云ふハ昔ハ



工天はよく馬のそのを思つて往年に鞍高の平  
尾貨平に過つた時此を譲り、石鞍、紐を  
ついでのことといふ工風此といふと平尾に耳を澄し  
ておれが、其後、御殿の始まつて、平尾に一  
日自今を訪ふ来り、いつや石鞍、紐を  
お返しがあるか、是れ、就て一ト工天の  
本、御殿の首を削つて其を、  
型、石鞍を心つて、  
ベン、紐を、  
ついで、針を、  
工天、を、

工天

止め、と、平尾、  
本、御殿の首を、  
ある、石鞍、  
一時、  
話、

十二月二日

○農、お、秘、  
村、通、三、  
と、新、蓋、に、  
本、と、  
論、十、一、冊、  
と、下、  
本、と、



記入せん比所也。其評語：苦心比然也。あつくと  
と見へておもしろく感をもて後視しつ。二十九冊  
の題署をより一畢つ。自助論の末尾に於て  
紙の白を存し、せん：吾感と記してと頼まん  
かまんハキも成りぬ。三著共々願ふ世に流布  
し比所の在著心あるが、せんが全部教役を免  
かん松村の年をゆしてあつらん。務をの爲めは甚  
しいことである。

十二月二日記

自助論(西田三志海)品行論を著し比スマイルス  
は敢て其の祖國に大なる名譽のあつらん人か  
其の二著の兒を用倫理者といふ位に能はる  
ことである。此の原著の本を比にせしむ

西田三志海

とせん比所也。あつくと。せんが日本に譯さんて後  
あの大船中をよみつけたことを著者が云く比々  
吾所の感に打ん比かあつらん。スマイルスは祖國  
國々も多教の知也を日本に得比ことを著  
人比おもしろい。西田三志海は教字の訳  
筆を著し比の流し初年一著花公が教  
己、引比のせん、せん、随て教字のあつらん  
在へ比時である。いつかや教字の國者彼長久  
松氏に交へ比流し比のあつらん。流し比係る者ハ  
今も存し比あること。當時の今も然る著者と  
虽も多教とせん比の流し比のあつらん。教字のあつらん  
本此二者と自由之理といふ大いせん、せん比就中







書卷が故方第一目前に在るの思ひを承る。今おの  
手稿に接して一層追慕の感多きを得た  
い。不思議にも三種の澤木の手稿が涇城に  
帰せし友人松村氏の手紙に由りしことを知つ  
て宛から吾手紙を返されたとて欣喜の情を  
禁ず得るものがある。即ち所感の一端を  
書尾に録す。

北中村教書館三博士の巻尾に跋する初行

十二月三日

○正倉院の聖前御親筆に記しあるが、記帳に類  
の臆ろけしある北吹雪も亦あるから交へぬれこと  
を書きつけると、倉に北中南の三合も成り、北合も

御物帳にある聖武帝の御遺物が納まり、中々親毛  
家の文書能、南に法令の道具が納まりある。中の  
倉に後入遣えんれよれと云ふ後方あり、此の  
研究は、美を否定し、初めから連絡しれよれと  
云ふである。右の吹雪も亦あり、北側の倉に  
焚いた其の焼痕に今も認め得るものと云ふが、徳政  
に龍神がおを注いで清しとめれとあり、倉の附也  
の杉の樹の下に小石の祠がある、美に龍神を祀つ  
たよれ杉本宮といふところ。千二百年前の物を木  
造の倉に納め、美が其の儀としてあるとある  
といふ、思へ、不思議なやうなものだ。御物の由りも  
七六切と云ふ、天子の御親書を以て封するの例



と云うてあるを、世界の例の如いことであらう。中々  
細まるとあるところ天子のお手回りのものがあるが、  
その貴重であること、勿論、千二百年以前の工芸  
資料として七実、古い澤山、天子の御物として、  
それから来る、銚、比、の、前、に、  
用の容解するも、其具、の、後世、  
工藝の如くを知らんとてかと思へ、  
の調つてあるもの、銚、の、  
一時天正時代のもの、  
家、の、  
あることを知らぬ、  
かあること、

天正

か、

○、  
この内、  
も改め、  
六枚を、  
リ、  
あり、  
歌、  
す、  
今、  
得、

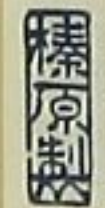




兼葭堂の遺蹟と瓶橋

鎌田春雄

木村兼葭堂の邸址は、今日大阪西區北堀江通六丁目十番地及十一番地に相當して瓶橋北詰西へ入る北側に屬す。東の辻よりいへば四五軒西にして現在、瀧井勇三氏、路次、瓦斯會社の派出所、小室公證人役場、小栗合資會社の諸家を占めたる間口凡十間、奥行二十間の邸宅たりしなり。昔の町割によるに一町四面を四十間として八軒の家を立てしなれば坪井屋の邸はその東より二軒目に相當するなり。余は前年昔の儘なる姿を存せしその邸内に居住したりといふ森本清一郎氏に囑してその記憶圖作製を得、且同氏より親しく説明を聞くを得たり。圖は別表の如し。二階建なりしも二階は低くして單に物置として用ひたるに過ぎず、室内一体に光線暗きもゆつたりとして餘裕ある建方なり。圖中離座敷と茶間とは森本氏先代の増築する所たり。明治四十一年頃邸全部を破壊して借家建とするに及んで全く當年の俣を存せず。唯一つ残るものは土藏のみにして今日公證人小室氏の住家に屬せり。その昔の位置より移建せられしは明治四十二、三年頃の事なるが根石ももとの儘にして中は六疊許敷くを得べく、床少し高くて二三段を上りて入る。小道具を入るゝ用に供せしとおぼし。右は森本氏の陳ぶる所たり。余は兼葭堂の一部をその土藏に追想せんと欲して昨秋觀覽の事を小室氏に乞ひしも同家に支障ありて許されず。森本氏の言にその土藏の壁に坪井屋といふ彫込みある由なれど親しく見ずて過しぬとのこ



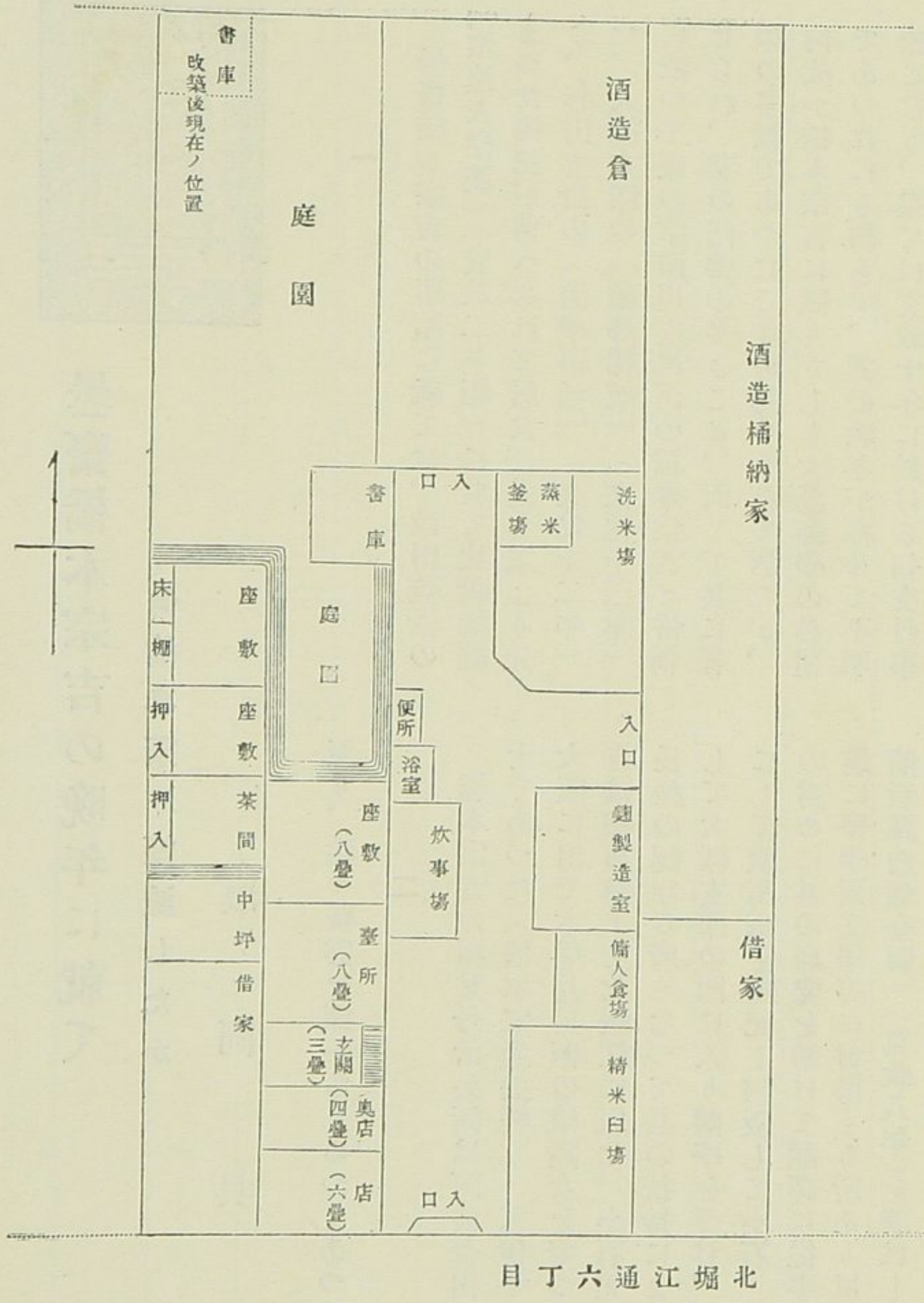
となり。余思へらくその彫込みといふは文字にあらずして或は大應寺の墓碑に刻まれたるの如き圖の彫られたるにてやあらむ。親しく検討し得ざるを憾みとなす。猶森本氏が坪井屋即ち兼葭堂の邸に住まれたるは三代前の事にして清三郎といふ人に始まり、酒造家森本清兵衛氏の妹婿として此處に移り分家を立てられしなり。現今の家主は川畑定次郎氏なるやに聞けり。木村兼葭堂の堀江居住はいつまでなりしか判明せざれど寛政二年十月伊勢長島に轉居するまで此處にありしことは事實にして寛政五年に歸來せる際なほこゝにありしや否やは明かならず享和二年には吳服町天満屋太助の借家住たり。其の死後を嗣ぎし甥なる吉三郎はもと御池通六丁目坪井屋長右衛門方同居たりしが繼承の際は同じく吳服町の借家住に於てせるものゝ如し。されば瓶橋畔の邸は兼葭堂死の直後誰の住せしかを明かに知る能はざるなり。兼葭堂の生活の質素なりしことは兼葭堂雜録に見ゆる所及び草堂規約等に於て之を知るべく其の家は屢普請し普請毎に狭くなるといへり。關所の際には借家四軒ありし由なり。兼葭堂の堂號は實にその井戸より兼葭を出せるによるものなるが、井戸の位置は濱側(昔はこゝを樽置場とせしなり)道路より一間半許下る處にありてその形正方形の半間四方石枿あり高さ五六寸、水面までの深さ二間半程にして達す、故にふり釣瓶にて汲むことゝす。水深三四尺にして清水湧出づ。森本氏居住の時には夏は金魚賣の水かへ用として役立たれ冬は湯にて洗ひたる桶などを洗ひそゝぐ用に使ひしことなり。然るに明治四十二年頃借家を建つるが爲にその上に板石を蓋ひて七分三分にわけ、七分は借家の建物にて占められ三分は川へ水汲みにゆく通路にありてあらはるゝのさまとなれり。されば内部は埋め居ざる筈なりといふ。即ち現在、小室氏の斜東向ひにして咲山鐵工部川勝富之助氏の居住に於てその址を認むるを得るな





り。  
 兼葭堂號を稱したる始をいつの時にするかを明かにせざるも明和五年版の三都學士評林に當時三十三歳なる彼が兼葭堂の號を以て、その頭取連の地位を占めたるを見てその以前なるを知るべく又享和元年蜀山人との對話筆記なる書に題して遡遊從之とせるに見て秦風兼葭三章に於けるの深意を察すべく彼の此の井戸に對する興味の深きを覺ゆるなり。更に余は其の巽齋なる號が同じく此の井戸に因みて易の卦に巽下坎上、水風井、改邑不改井、无喪无得、往來井井、汔至亦未繙井、羸其瓶凶、とあり豕に巽乎水而上水、井、井養而不窮也とあるに見て彼が井の徳を以て自任し殊に有能養人而無窮也といふを理想とせるを知るなり。その二萬卷の書を藏せるは決して自己修養の具たるのみならずして人に益せる所の殊に大なる、草堂規條に「書を集むるはもとより朋友と共にせんとす、書を汚すを以て嫌となす勿れ」とあるに見て知るべく之が爲に多大の啓沃を得たるものに劍雲泉あり栗山竹窓秋成木米等の徒又枚舉に違あらず愈考へ來りて益その人の徳の井の表現なるを知る。猶余は瓶橋なる橋の名を命じたる者の亦彼なるべきをおもふものなり。堀江川の開鑿は彼の生前四十年程の事と思はるゝも早く架橋の事ありしや否やは詳にせず。或は彼親しくその架橋に盡したるやも知れず、そはともあれその名の奇なるは之を前舉の井の卦に見ゆる羸其瓶凶といふに於りてこそ始めて氷釋せらるゝにあらずや。されば此の橋の名も彼が愛好せる井戸に因めるを知るなり。  
 明治三十四年三月十日兼葭堂百年忌を安土町四丁目書籍商事務所に開かれし時は彼の井戸より兼葭水を汲來りて煎茶用として賞玩せられ昔を偲ぶよすがとせしものを今日になりてはその事叶はず遺蹟に就て何等表彰あるなし。頗る歎すべきを覺ゆ。

兼葭堂遺蹟圖





○今日教養中 一二書坊と訪りて二三の圖書を得  
十二月四日

一 赫鞞跋録

一冊

此書防抄家圓豐田養慶子碩の著す所  
變曆年中平安文男在りの出ぬに係り、  
本中の異品を花の海に於てあるを凡例  
と見え、洛東渡舟精舎に因志と居  
く四方の庶物も花の海とあるは其の出  
品中のものを扱ひたりと見え、若首の教  
收異品の田を出す、風鳥、クマカ、答ア  
ツモリ草、サイハイ草、ハカヤサメ馬尾  
障、等、一甲賀散元の體定に依

赫鞞

り花を定むとあり、是れ稀款の由也

一 天化帖 巻一

一帖

此書皇後の後赤坂田の書翰の傳り  
金石古墨の模本を刻し、其のよき  
碩田天保年間若千を刻し、世に出  
す、其のよきと見え、其のよき  
雲野天因等補刻せしむる由あり、  
巻尾に天因の碩田志と上梓の如末  
あり、其古十行、似字あり、其のよき、  
口内次女等の題字、山陽赤坂田法定  
の詩文あり、皆碩田の書翰を獲りたる由



出版のとき補刻しつゝ表尾を裁き  
 あり補刻の印を以て之を示す。是  
 既賞の價値あるもの也

一 萬國新法 森崎中良 全一冊

是書ハ稀觀者多しと云物ト註記を以  
 せざる也

東京製本

寫



丁卯夏肆月 簑笠隱居

印 曲亭 著作堂  
 馬琴 (印章 八分角)

丁卯夏肆月 簑笠隱居

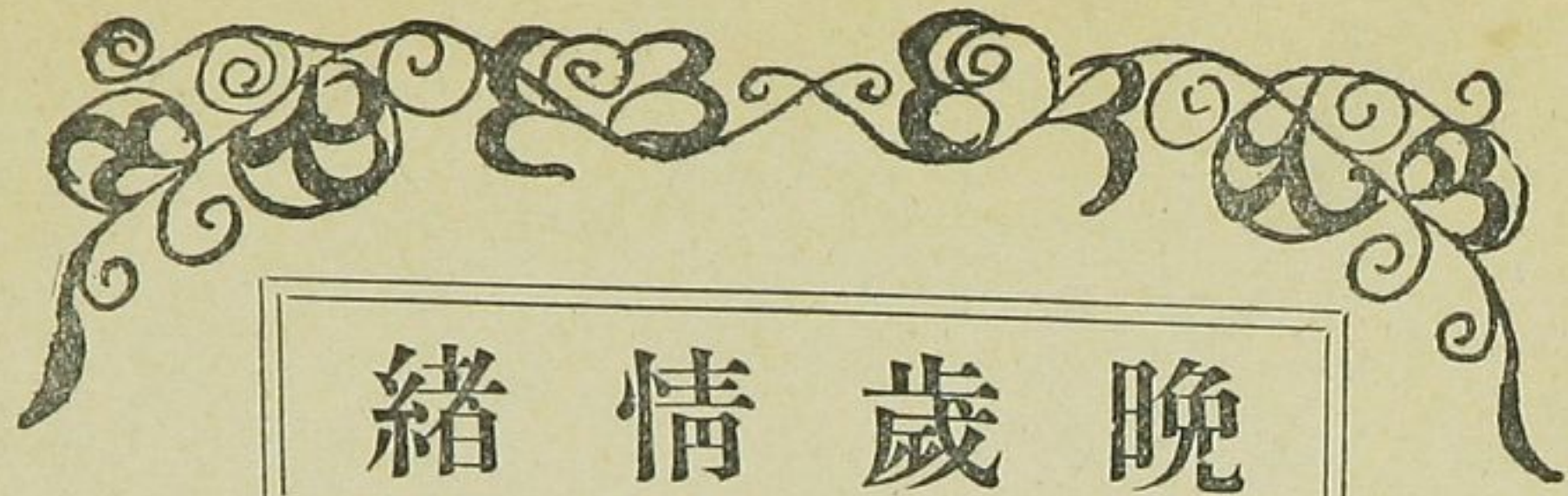


○此夜の比谷園の館に日入今夕の秋、前田家尊任  
 閣為本の字匠を撰知りて其ものを一覽す。此の在来  
 こそ尊任久才の字匠にして其別筆者、納め給ふ









# 緒 情 歳 晩

## 砂時計の感想

市 島 春 城

◇  
最近銀座からイギリス製の砂時計を買ってきたが、別にこれは古道具屋から発見してきたものではない、すべてに保守の國である英國では、今でもこの種の砂時計を用ひてゐるものが見えて、古代物でもなんでもない、新しい製造のものであつた。我輩はこれを書齋の一隅に置いてつらく、近代の機械文明の繁華といふここに就いて考へて見た。近頃の文明品は、いずれもその機械の細工が精巧を極めたもの許りであつて

如何にも騒々しいものばかりである、聲の無いものは殆んど絶無である。  
實に騒々しくて堪まらぬ、その點で我輩の手に入れた、イギリス製の砂時計は、蒙昧時代の遺品ではあるが、この時計を見ていると、つくづくこの時計が現在の機械文明を冷笑してゐるやうに思へてならない。  
皮肉な存在のやうにも思はれる、我輩は時々この砂時計のやうに、社會に向つて少し皮肉な事を言つて見たいといふ考へも持つ、いつたい近頃の機械文明なども、まだ文明とは言はれない、中途半端なものである。成程、近頃の文化は便利だとは思ふ、然し砂時計を見ているとこの方がすつと便利さが徹底してゐる。  
この時計は二つの、硝子の球がつながつたもので、一方に赤

○日本能登の記あるやつてききりあつては後  
とよふか別と所感もあつては唯比あふ勢とあ  
砂時計の口をさすも。別と筆記もしな  
いから漫ろといふと後と左の記を  
か載つてゐる。逸分河津の地を  
復後とあつては味感の河津の記  
者とあつては河津の記が去来ぬぬ  
存夜のあつては河津の記が去来ぬぬ



日本経済の発展とやうな事を言ふ事は

い色の砂が入れてあり、これを轉倒して据へて置く、上の方の球から、下の球の中へ、全く絲よりも細い筋になつて砂が絶えず落ちる、上の球から砂が奇麗に下に落ち切つてしまふに要する時間をはかつて見る、丁度一時間かゝつてゐる。

時計いふものを、かうした原始的な幼稚な器具が、立派に精巧な時計と同じやうな役目を果してゐる、いふことを想ひ見れば、現今の所謂文明何の進展ぞ、皮肉も言つて見たくなるのである。

かうして時に就いての觀念を、この砂時計の非常に靜的な刻みのやうなもので、計つて見るにすれば、慌ただしい騒々しい現代の時の経過などは、甚だ浮つ調子な意味のないもので、歳晩に際して砂時計の感もまた湧いてくるのである。

人間はあながち生きる爲めに許り養生をしてゐるものではない、死にたくないといふことは誰と同じことではあるが一年の末に無事安泰に暮らしたといふことを追憶して、一種の愉快をかんじるが、何ぞはからんや段々老ひてゆくことを祝福してゐるやうなものである。

で計るといふこと、これも大切なことでもある。

一年を三百六十五日に分割して、その歳末に借金があれば之を返済すること、ここに決めてゐること、無意味なことではない、然しこの物質的な返済も、兎角片附け難い場合が多い、時計いふものは法便であつて、法便して時をもつて區切りをつけてゐる、例へば夜の十二時といふ時間は、まことに意味のある時間であつて、酒の好きな人は十二時といふ時間がなければ、のべつ幕無しに通飲をすであらうが、この時間が存在し、明日に移つてゆく厳密した存在であるから、たいていはこの時間に引き揚げるといふことを知ることも良い習慣である。

近頃は時間の爲めに人間が追ひまわられ、身心共に奴隷になつて、まことに寸暇もないといふ、いまの世界の状態であつてラヂオは夜の世界にもさし進んで来て、神經質な或る男が、夜もおち／＼安眠出来ないといつて警察に申し出たといふ事實なども、何時かの新聞で見たが、これらも無理のないことだと思ふ。

身心に遲緩がなくなり、近來アメリカの或る人が、人間の生活はそんなに動的で許り生活が續けられるものでない、精神、肉體の休養、遲緩が大いに必要であるとい説いてゐる士もある。

その時我輩は演説をして言ふのに、政府は緊縮といふことを國策として、また一般にも大いに流行つてゐるが、この緊縮を年齢の上に應用できないのは残念である。既に過ぎ去つた分を、後に繰り延し、二十位若者がへつたら大いに助かる、更に二十年位働けば、我輩のやうなものでも、枯木に花の賑はひで少しは學校の爲めや、社會の爲めにも貢献ができればやうものである語つたのであつた。

七十歳といつても、何も老いたのではない、七十位は何んでもない、八十歳になつても怖れるに足らない、人間の壽命といふものを一般の人々が計算の仕方が間違つてゐるのであつて、これは曆の上からばかり計算するからいけない、仕事の分量に依つて計るべきである。

この方法で計算すれば、若いけれども大變な仕事を爲し遂げた人もある、これをもつて若死と言ふのは當つてゐないだらう。

一日を無駄に使ふ者もあり、朝から晩まで何事も爲さずに終る人もある。その意味では、一日生きてゐても、一日生きたことは言ひ難い、唯曆の上で時を計つたことより言はれない、曆の上

いふことを我輩は耳にした。

まつたくその通りである。もつとも反面には文化は、時を征服し、便利にもなつてゐて、飛行機の利用は、昔三十日かゝつた個所を、この文明の交通機關に依り、僅か二日間で飛び越へてしまふ、この論法で言へば、飛行機を現代人が利用すれば、昔の人が三十日を要した仕事を、二日間で片づけてしまつてゐるから、この二十八日間は別な用事に使ふことが出来ることになつてゐる。非常な幸福な時代に生れ合せたとも言へる。然しこれは計算の問題で、現代の人はそれ程時間を有効に使用してゐるか否かは疑問だ。老人は其の時間を重ねて生活してきただけの時といふものゝ性質を若い者よりも理解してゐるといふことができる。

歳をまつたものゝ境地は、さうしても若い人には解らないところもある、然し老人は決して若い者を信頼してゐないわけではない、昔の諺に『若木の下には傘を脱げ』といふことがあつて、この意味は、若い木は弱々しいものであるが、やがては亭々として雲を凌ぐ大木になる若木であるから、この後世怖るべき素質をもつもの、やがては英雄豪傑になるかも知れないところの若い人はその木の下で傘を脱ぐべき尊敬しなければいけない。



いふ意味である。

然しまた若い者も老人こいふものを、尊敬しなければならぬ、尊敬しなければならぬのは「老人の経験」であつて、これは何程若い者が机上で勉強しても企て及ばぬものである。老人の價値は、歳の摩擦によつて生じてゐるものだ。

若い者が老人なごは論ずるにたらずなごいふものがあればそれは間違つてゐる。老練になるこいふことは、老熟して始めて爲し遂げられることで、若い物の机上や、また曆に依つて分割された時間・精巧な文化的機械である時計によつてのみ経験が蓄積されるものではなく、如何にして時の本質に觸れこれを生彩あるものとしたかこいふ努力にのみ依つて決定する。我輩はその意味で、イギリス製の砂時計の前に、殊に深夜なごはこの時計の砂の落ちる音がたいへんよく部屋にひびくので、この音をきき心耳を澄ませひたすら歳晩の迫る氣配を靜かに感じてゐるわけである (完)

### 緊縮と除夜の鐘

柳 家 三 梧 樓

◇

私は歳の暮に、歳の暮の話をすることに餘り好みません。他人は知らず、柳家三梧樓はその方法を採りません。落語家は、處が果してそれほご歳末に仲んびりしてゐるかさうか、なかなか左様には参りませんが、人生すべからく歳末に悠長でゐる心掛けが必要なことを言ひたいのです。歳の暮の落語としては、『掛け取り萬歳』『言ひわけ座頭』『睨み返し』なごの演じ物があり、新しい處では『探偵鱈鮓』なごがあります。

暮れ酒、食べ物なごが結びつけられてゐる、フーミ湯氣の類のもの、うざん、そばの類が話の中で活躍する。

これらの食物の煙の出るやうな暖い話題を選むこいふことは、なか／＼肝心なことで、年の暮れに、氣の減入つた話を語り出しては、語り手も聞き手も助からない。

そこですな、藝界の人が普通の人の比べて、なにか偏見な妙



○次の随筆、ぬまのきまの月夜記等に  
為め左に想へる

孫の思出

河阿房

法皇御孫

お山の思出

吾家の田舎草

村上や物

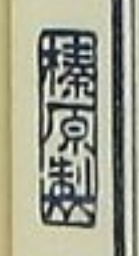
馬本好春

玉

酒と人

日保應用の御書

聖徳太子御書



未知の人から万載の印を字をみる

長埤の回顧

後名はちと三行

大帯致味

悲劇と喜劇

西園立志海舟をのぼる方す

中産階級を自棄自棄に導く

別境退の家と人をもつて

大隈侯及故刺殺

家庭と母

信玄の秘巻

大東京あまの





哲 田 勝 (選特展帝) 郎 四 卓 天

込 賦

おとあ山人

河 豚

柳 若

外 回 互

三 三 三

納 豆

紙 上 馬 の 陣 列

後 出 後 典

カウア 振 本

福 海

古 枝 歌

くともふし 毒 有 礼

風 景 と 春 南

歴 史 の 回 民 の 後 援

回 際 協 助 の 解

明 治 十 一 年



















を極育する。在りて日本の親をみると、おん心は母の愛を  
選ぶよきもの。日本の親は、切りにして母を抱かぬ長しと  
も母を抱かぬてみるもの。日本婦人の愛を良人に捧げる  
らうも、うき多く兒に捧げてみる。往々良人に北目へて  
兒の愛を捧げる。欧米の婦人は、エゴエステットの  
性かあつても、日本婦人の兒を抱く人とも無い。兒を産  
まざる婦人に完全な人間と云はる譯も、愛かか抱  
し多からず事だ。兒ある婦人の神は近いものも、  
牲的精神は、愛か純真だ。あつたの古は、  
か顛倒してゐる所を、柱を、父か母に代るも、  
所もあつた。高家の家度、兒を婢女の撫育、  
所もあつた。純真の愛、  
其の結果、

純真

このころ、また、世の不良の徒の、  
多くは母の愛、  
純真の愛が、  
か、  
て良人を待たんとし、  
良人、  
日感動、  
る亦以つて見、  
○手、  
の關係を、  
ハ身体、  
あん心、





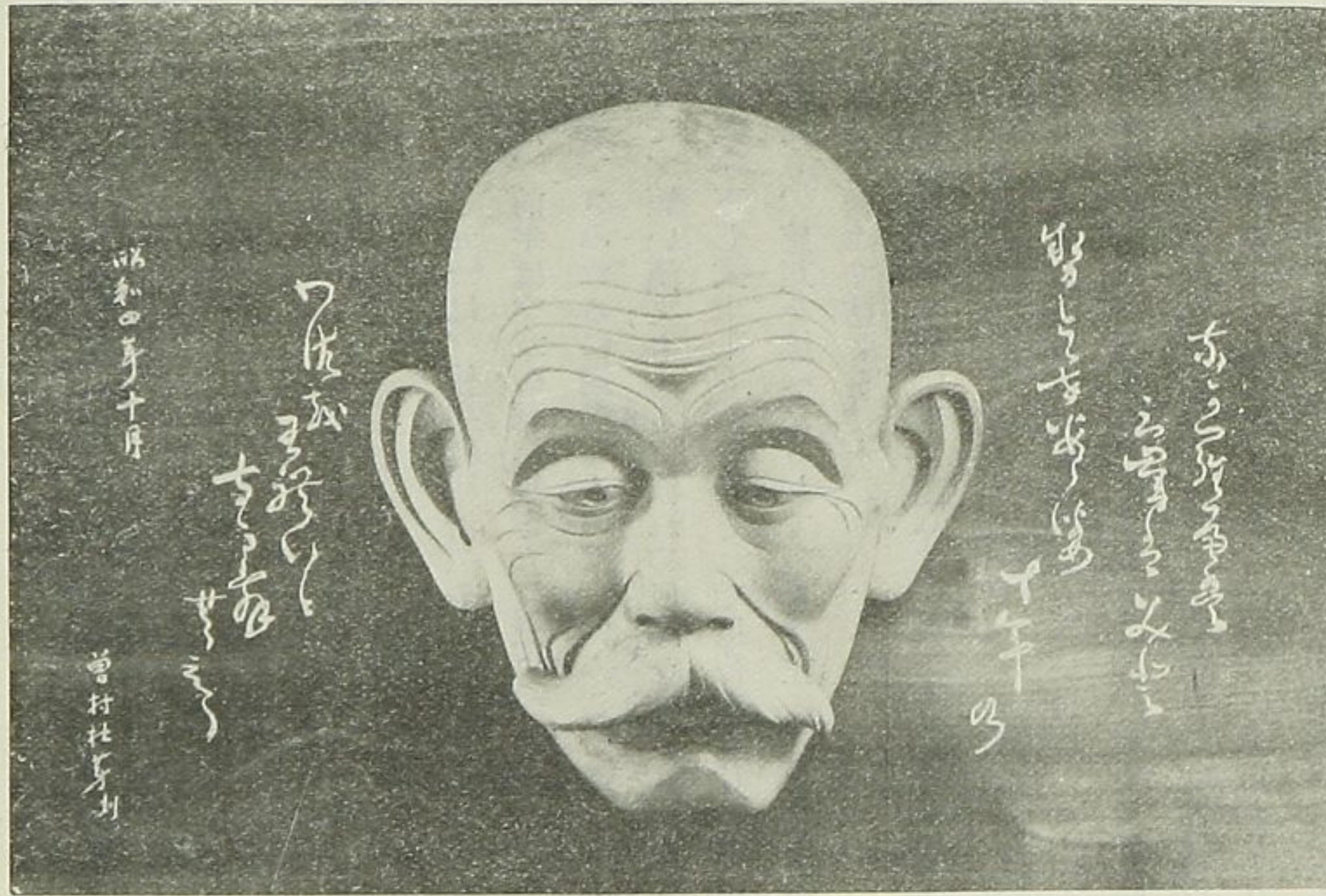






Totus Mundus Agit Histrionem

(世界はすべて劇場なり)



伎楽面風に製作されし  
坪内博士肖像(木彫)

この像は彫刻界の新人曾村杜芽氏が、樂山堂病院長村上幸多氏の依頼により、坪内博士の意見をも参酌し、伎楽の面を加味して作られたもので、全く新しい試みですが、斯界先輩の賞讃を博してゐます。先般村上氏から坪内博士に進呈したのを博士から當演劇博物館に寄贈されたので、館内の逍遙記念室に取附けました。面の材は檜の良材、取附けた額板は桂です。額板の歌「ながらへば三とせは三とせ十とせあらば十とせのわざをわれいとなまむ」は、坪内博士の自詠自筆を刻したものです。

(此の像の頒布方を希望の諸君が二三ならず既にある所から、實物を縮機し、頒布する會を設けました。詳細は本誌第十一頁を参看の上即刻御申込下さい。)

- 田中道平
- 田中道平
- 高田早苗
- 三宅雄次郎
- 若田四郎
- 石浜新一
- 小市徳太郎
- 鈴木金吉
- 原田徳次
- 山田健
- 土方寧
- 根岸録次郎

此の像は彫刻界の新人曾村杜芽氏が、樂山堂病院長村上幸多氏の依頼により、坪内博士の意見をも参酌し、伎楽の面を加味して作られたもので、全く新しい試みですが、斯界先輩の賞讃を博してゐます。先般村上氏から坪内博士に進呈したのを博士から當演劇博物館に寄贈されたので、館内の逍遙記念室に取附けました。面の材は檜の良材、取附けた額板は桂です。額板の歌「ながらへば三とせは三とせ十とせあらば十とせのわざをわれいとなまむ」は、坪内博士の自詠自筆を刻したものです。

此の像は彫刻界の新人曾村杜芽氏が、樂山堂病院長村上幸多氏の依頼により、坪内博士の意見をも参酌し、伎楽の面を加味して作られたもので、全く新しい試みですが、斯界先輩の賞讃を博してゐます。先般村上氏から坪内博士に進呈したのを博士から當演劇博物館に寄贈されたので、館内の逍遙記念室に取附けました。面の材は檜の良材、取附けた額板は桂です。額板の歌「ながらへば三とせは三とせ十とせあらば十とせのわざをわれいとなまむ」は、坪内博士の自詠自筆を刻したものです。



以上と余十三名、田中、山平、の如皆七十の死ありて  
 鋸倉の七十五、田中、銀の七十四、わが年長し、亡友  
 日捧けたる冷酒を皆く、飲ち、亡友を就て後  
 る、いとと雲居の喚、各々、知る事を語り、突か  
 ら生てみる友人、抱ふこと、罵倒を浴びせ  
 かけ、るも、田中の情味、似くありて、ことと思  
 はん。席上、余も提議し、吾々、こと、七、其、内、の  
 一人、と、うん、生存の、ゆゑ、銘々の、履歴、や、其、敗  
 法、をも、録し、一冊の本、と、する、も、一、冊、と、せん、自  
 分の、法、史、を、歴、山、坊、して、自、から、筆、し、記、せん、亦、人、を  
 一、冊、と、せん、と、福、問、せ、ある、こと、も、あ、らん、法、史、を、請  
 踏、る、熊、鷹、と、稱、ん、と、今、衆、皆、可、と、する、も、次、田、の、評

田中

多と田中、山平、土、方、等、抄、ん、ん、教、令、

〇山平の、田中、等、の、得、る、法、史、を、も、其、弱、き、録、す、と、  
 是、の、左、の、二、三、二、三、と、き、す、

一、法、史、撮、要

一冊

市河、米、屋、か、あ、る、人、の、為、り、と、自、家、に、て、請、  
 け、る、事、卷、末、の、後、述、と、あ、り、流、石、に、抄、  
 言、也

一、江、府、神、社、取、記

二冊

荒井、嘉、敷、の、著、享、保、十、三、年、江、戸、の、開、  
 敷、す、所、各、神、社、に、就、て、委、し、き、考、証



あり、稀観の色也

一 橋南松書幅

此幅 映古堂の三字を書きす南松の  
あつちを稀観の余此人の文字を愛す  
且つ此の三字余の書家に揚るに  
らう勝心入る、此以也

一 水鏡只角墨自筆句集

一 水鏡札張込帖 二冊

一 一重衣

二冊



昭和八年版大氣能後定の若女  
刻中の稀観書也

一 人物映画式

若女等の画式式存あり、此中人物  
の画式其中の致あり余之んを愛  
す





右 伊勢國司館址發掘土符 三村竹清氏藏

藤原氏藏

此の土符は、伊勢の國多氣國司館址より、殘缺一片と共に發掘されしと傳へて、松坂町中山長藏氏の所藏なりしを、櫻井祐吉君に轉じ更に予に歸せしものなり。土符に就きては、近刊の考古學雜誌に、佐々木氏の詳細なる説ある上に、伊賀の上野なる村治圓次郎君より、亦委しき書信ありしを、綜合して略記すれば、此の物の發見地は三重縣に限られ、現知られし完全のもの、僅に十九枚にして、上は應永三十一年より下天正四年に至り同一年號のもの無く、又同一花押のもの無しと云、花押に足利將軍家のものありともいびしが、然らざるが如し、恐らくは伊勢の守護たりし仁木氏の花押ならんか。符號は米人馬に限り、其月も十月或は十一月なれば、貢米徵發に用ひしものかとの説あり、出土地は、此符を除きて、他は上野驛附近、國府のありし府中村西條より新居の古驛に倒る道筋、三田東村に於て、各個に發見されしなりといへば、此符の出土地に就ては一考すべきに似たりと云。三村清三郎記



○ダグラス、フエーヤ、パンクスの劇、映画、小説、自伝、  
比、染、い、つ、も、英雄に扮して、義勇の為のし、  
を、為、し、彼、の、行、動、は、既、決、の、危、険、に、臨、む、も、微、笑、を、  
湛、く、後、悔、過、も、な、し、自、分、に、此、後、を、愛、し、大、  
の、決、意、は、決、意、の、あ、る、毎、に、決、て、死、す、の、決、意、を、な、す、る、  
女、優、が、主、人、ナ、リ、し、ピ、ワ、フ、ス、ト、と、死、を、自、ら、な、  
空、の、つ、ら、い、な、り、を、僅、く、の、間、に、歴、代、的、親、友、を、受、け、  
比、神、の、上、座、の、座、を、奪、取、し、此、の、時、の、状、景、は、  
ル、々、と、這、入、つ、て、此、の、格、外、な、の、映、画、を、現、し、表、か、  
ら、女、ん、七、女、の、格、外、中、に、あ、る、か、の、思、を、な、し、比、ダ、グ、ラ、  
ス、自、身、七、女、の、格、外、に、敬、仰、し、敬、慕、し、英、雄、の、好、む、  
英、雄、の、事、跡、を、高、く、お、も、て、日、本、人、が、私、の、事、に、決、意、し、英、雄

英雄

的、能、力、を、主、人、に、な、し、て、の、田、舎、を、あ、ら、わ、せ、  
成、る、を、い、ふ、も、あ、る、が、主、人、映、画、が、大、衆、の、情、懷、  
を、女、の、め、い、な、り、な、か、ら、あ、る、故、に、ダ、グ、ラ、ス、の、映、画、  
の、英、雄、に、あ、る、か、の、思、を、な、し、  
○昔、往、の、盛、ん、に、行、い、ん、に、天、平、時、代、に、寄、り、生、の、故、  
も、多、か、つ、た、文、者、も、存、在、し、て、あ、る、よ、う、に、い、ふ、も、  
か、ら、あ、る、と、い、ふ、ん、と、あ、る、。寄、り、生、の、寄、り、生、書、生、書、  
師、任、師、を、い、ひ、呼、び、な、た、。今、の、表、白、心、を、  
比、と、い、ふ、け、い、な、か、ら、い、ふ、ん、と、い、ふ、ん、と、異、つ、て、あ、る、。表、白、  
心、の、寄、り、生、も、あ、る、と、い、ふ、ん、と、意、師、と、呼、  
ん、だ、  
○全、属、に、彩、色、を、施、す、こ、の、工、藝、上、絶、え、切、つ、た、こ、の、







のは私が此篇を書く目的でない。私は都會地に生活して此の親しみある土と追々離れる傾向のあるのを見て、心細き感を抱かない譯にゆかぬのである。都會地の土は人家稠密の爲め種々の建築物の下になつて行く。大道もアスファルト其他木石の築材で貼り詰められ、土を踏むことが出来なくなりつゝあるのだ。文化といふものは殘酷性があるかのやうに、人の土に親しむことを飽まで妨害せんとする。昔は震火水の災厄に備へて遊び地を澤山に剩したものであつた。川端に廣い餘地を存して假建築の外、絶対に許されなかつたのも、水の氾濫に備へる爲めであつた。市中に幾箇所も廣小路のあつたのも、植木溜と唱へて、あちらこちらに多く空地のあつたのも皆火災の避難に備へたのである。三百の諸侯が一村にも近い大なる屋敷を有し、更らに中屋敷下屋敷までも持ち、皆な鬱鬱たる樹木に包まれ、高處より望めば森林を包有する大都會であつたのだ。普通の民家でも家前に庭があり家後にも庭があつて、富家は市中に空地として多くの土地を所有した。江戸時代土一升金一升と云はれたが、それですら土地は豊かで頗る餘裕があつた。勿論家康入府以來江戸の人口の繁殖は年を逐ふて著しいものがあつたが、それに伴ふて海や沼を埋めた面積も頗る大なるものがあつて、今日繁華の市街となつてある多くの場所は、昔は水中のものであつたことは古圖が證據立て、ある。江戸時代は人口が稠密となつても右の次第で、土に親しむには事を缺かなかつたが、今は土地が新たに生れることは幾んど無くして、人口のみ非常の速度で増進するから、土地は益々狭隘を告げ、屋上屋を架し、人は五層六層の空に住して土とは全く縁切れとなりつゝある。大震災の政調で道幅を廣めたり、公園を作つたりしてゐるのは結構でもあるが、都會に存する土地は最早幾何

もなく、追々郊外へ延びてゆくが、さて郊外に絶対建築を禁じて大なる餘地を存し、萬一の避難所となす計畫があるかどうか。今日の處では唯だ延びるに任かせてそんな設計がありとも思はれない。今日あらかじめ或る地區を定めて建築を禁ずるでなければ、漢々たる郊外地も後には土に親しみ得ない所となり、非常の災厄の起る時に避難の所のないに困むことはありはせまいかと氣遣はる。三萬坪の地積を有する被服廠跡ですら大火に包まれては避難地とならなかつたことから考へると、小規模の公園では避難の役立は恐らくなし得ないであらう。市内で大なる餘地のある所と云へば、宮城内と上野公園と明治神宮の内外苑位に過ぎない。今の復興計畫で道幅を廣め、小公園を設ける位で、果して大變の場合被服廠跡の二の舞を演ずることが無からうか。考へて見れば随分心細いものである。地震を知らない國土に於ては土地が狭く

ともよいかも知れぬ。土に親しまずとも辛抱が出来るかも知れぬが日本は事情が異つてゐる。土地に親しむことがやがて災禍を免かるゝ事になるのだから、此の意味に於て外國に模倣してはならぬ。委しく云へば、人口の稠密を節度する工夫が無ければならぬ。同時に大なる空地を幾箇所も備へねばならぬ。或る地區を劃して絶対に家屋其他の造營を許さないとしなければ、帝都の不安は到底除き得ない。これにつけても田舎の人に告げたい。何故親しみある土地を離れて土なき都門に來り、危地に身を置くことをするのだ。都門の土なき修羅場を知らずや。

故郷に對する懐かしみは、親族故舊にあるは勿論一木一草にもあつたけれども、此等のものは代謝を免かれぬ。唯だ永久性を持つて百世變らないものは土地である。故郷の土は其等を産み其等の祖先をも産んだ慈母である。吾等の祖先が朝夕詠めた山が、その儘今の山

である。その山は必らずしも名山でなく、敢て風景に富んでゐないでも、家山には風光絶佳の名山以上には懐かしみのある譯は、吾等の祖先以來代々を知つてゐるからで吾等の歴史を知つてゐるものは、此の大自然の塊物の外に何物も無い。歴史は斷續することがあつても、此山のみは連續的に歴史を知つてゐる。唯々黙々として何も語らないまでものことである。よく人の功罪を論ずる場合に云ふことだが、家山に對して面目があるとか無いとか云ふ。よく案じた言葉だ。人は他郷で成功したり失敗したりさま／＼であるが、成功の人や善行の人は郷人が褒めずとも、家山に對しておのづから自負の心が湧き、失敗の人や悪行の人は中心家山に對して慚愧たらざるを得ぬ。己が家史や郷土史に汚蹟を残したものは、斷續なく歴史を知つてゐる家山に對して、痛切に辱みを覺へる。宛がら地下に入つた父祖から叱責を受けるかのやうに感ずる

包有する大都會であつたのだ。普通にも庭があつて、富家は市中に空地として多くの土地を所有した。江戸時代土一升金一升と云はれたが、それですら土地は豊かで頗る餘裕があつた。勿論家康入府以來江戸の人口の繁殖は年を逐ふて著しいものがあつたが、それに伴ふて海や沼を埋めた面積も頗る大なるものがあつて、今日繁華の市街となつてある多くの場所は、昔は水中のものであつたことは古圖が證據立て、ある。江戸時代は人口が稠密となつても右の次第で、土に親しむには事を缺かなかつたが、今は土地が新たに生れることは幾んど無くして、人口のみ非常の速度で増進するから、土地は益々狭隘を告げ、屋上屋を架し、人は五層六層の空に住して土とは全く縁切れとなりつゝある。大震災の政調で道幅を廣めたり、公園を作つたりしてゐるのは結構でもあるが、都會に存する土地は最早幾何

のほ、家山の一特徴で、山に對し儼じきものと痛感するのも此故である。

### 無用の書物

(虚妄の正義の序詩として)

蒼白の人  
路上に書物を賣れるを見たり。  
肋骨みな瘠せ  
軍鶏の如くに叫べるを聴く。  
われはもと無用の人  
これらもと無用の書物。  
一錢にて人に賣るべし。  
冬近き日に袷を着て  
われの窮乏は醋えはてたり。  
風吹く若し行人散り  
古き友情さへも我れを知らず。  
いかなれば涙を流して  
かくも黄色く古びたる紙頁の中に  
わが情熱するものを情熱しつゝ  
さびしき字宙を獨り語らむ。  
ああ我れはもと無用の人  
無用の書物を街に賣るべし。

萩原 朔太郎

然様を正し、わるいことはなすまらぬ。多くの人は節省の紀行などに

家山欣然我れを迎ふなど云ふけれども、果して欣然家山に迎へらるゝ人がどれほどあらうか。錦を衣て故郷に歸つても道ならぬことをして産を作つたり、高僧に有り附いたりしたもの、果して家山が歓迎するであらうか。人は己が都合で勝手に家山に背へて脱走し、其ま、終に歸らぬもあり、都合がよくなつたと云ふて傲然として歸へるものもある。それ等輕薄の徒を家山は何んと思ふであらうか。殊に近年のやうに故郷には懐らず、大切な墳墓の地を捨て、親しみある土地に背き、無闇矢鱈に都門に走るのを見て、家山は何んと感じてゐるであらうか。

都門に趨る地方男女は放言すらく、田舎の土くさきに堪へずと、若い男は土くさい女を娶るを欲せず、女も亦土くさい良人を持つを肯んじない。彼等は土の香りの身に附着してゐるのを恥辱としてゐる。畢竟田舎の土が有り餘つてゐるから、斯る勿體ないことを云ふ



のは私が此篇を書く目的でない。包有する大都會であつたのだ。昔もなく、追々郊外へ延びてゆくが、ともよいかも知れぬ。土に親しま

のである。海上生活などをして土に憧憬がれてゐるものから見たらよくもそんな贅澤なことが云へると思ふに思ふことであらう。土の香りは幸福の香りである。地方人が都門に誇り得るものは彼等自からの嫌ふ土くさい所にあるのだ。それを厭ひそれを恥るのは畢竟土に理解がないからの事だ。

### 緊縮小景

太田 正孝

#### 一、牛肉屋

◇この間、神田の『中川』といふ牛肉屋へ飛び込みました。大蔵省でお話をして、——學士會館でヒル飯をたべて、——中央大學で講義をして、——それから、上野の自治會館における東京市の水曜講座に出かけようとする道です。ぶらりと、むかしの書生気分にならうとして、小川町どほりを歩きます

だが、ダメです。道が廣くなりすぎてゐます。あまりに忙しい人たちが多いのです。そのとき、中川の牛肉屋の前へ來ますと、續いてある店の別の入口に『カフェー中川』とあるぢやありませんか。オヤとおもふと、濺色の紙に白字で『牛鍋』と書いてあるのが掛つてゐるぢやありませんか。カツフェエなかでも——靴をぬがずに——食べられるのかと、はいりました。世界地圖のやうに薄く汚れてゐます。客もなく、靜かで結構です。肉が煮え出しました。太い手もち主の給仕が煮てくれます。——そのうちに、蓄音器がはじまります。呂界です。『三勝半七』です。犠牲そのものかたまりともいふべきお園が、半七おもひのために泣かされるところで、いいノドです。學生時代によく義大夫を聞きに行つたことなどおもひ出します。實はビールを半分傾けたところ。『かかれとしてしも……』

——さうか。——ぬぼたまの夜の……イヤに枕言葉の多い文句だなア。『むすぼれとけぬ片絲の……』マタか。それぢやほんとの後の文句が待ちかねなさア。『いまごろは半七さん！』——じれつたい、なぜ早くおッしやらないんだ。——牛肉は、たぎるばかりです。……ふと見ると、私のたてであるテーブルの前の低い衝立の向ふにお客さまが來ました。角刈り頭です。サラリーマンか。職人か。やつぱり牛肉の注文か。ナニ緊縮だつて！ ああ、折角の気分も、この言葉でプチこわされてしまひました。牛肉を食ふこと、それも緊縮か！

ぼかりの祝ひに數人の友たちを招いたのです。そして、來られるときに十錢の買ひ物をして來て下さいと申しました。私は、とかく緊縮とか節約とかいふことをはきちがへて、三度の食を二度にするといふやうな人たちの少なくないことをにががしく思ひますと同時に、買ひ方について考へる人たちの少ないこともいけないと思つたからです。十錢としましたのは、品物の選擇にも困るからです。そして家族のものに對しても、同様の命題を與へたのです。すなはち、隠居の老父母にも、妻にも、甥にも子供にも、女中にも——。子供などは、このことを聞くなり、小さい胸をいため出したものです。ただし、ある期待をもつてあつたやうです。それは、この買ひ方の如何によつて賞品をやるといふことにしたのですから——

◇食後、みなものの買物は、私の前に陳列されました。お客A||懐中バサミ。お客B||

#### 二、買ひ物

◇十一月の十三日に、私の何回目かの誕生日が來ました。私は、心

のまを愛せ給へ給へ。呼んぶのさゆひんも、七  
かくも長給のさゆひんも。恐くも近き決心つに  
名もあつうと、さゆひん道のさゆひんも、さゆひんも、  
○さゆひんの御物ハ、ゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
いのりおろく、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
云ひておろく、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
のさゆひんの池と、接ぎ木、五千六百四十五粒といふておろく  
が、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
決してさゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
九十一、古櫃の板が、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
六十三本、あるさゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、  
小俵のさゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、

さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、さゆひんも、







碎けたまふ、正倉院へ戻つたが、其の碎けた澤一ハ  
地金を多く飛つてしまふといふ為めである。地金の移入木  
が積重つたおのから空とらうてゐるが、盗人も多しを破  
る程なものをぬいのも、床柱を穿つから、正倉院の修  
補の折る、柱を三重に心つくと云へてゐる。

○正倉院の納まつたものは、名目振てありしてゐても  
品々無くまつてゐるものが多い。中々、極めを換へ  
品々無くまつてゐる義之や政海、海公の品々  
も、其の目録といふ文獻もあつたが、正倉院の極め  
と法印さんといふ文獻もあつたが、正倉院の極め  
帝王の御遺物として永久に保存を要するもの  
ものとは何れと法印に及んば、正倉院の極めは法印

川口さんといふが皇族や権臣の御遺物も、正倉院の極め  
ものか、或るもあつて、正倉院の極めは、正倉院の極め  
り、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
を、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
ら、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
ものも、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め

○正倉院の最徳川の末季、正倉院の極めは、正倉院の極め  
の流るまつて、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
けた時、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
る、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
まつと、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め  
年初め、正倉院の極めは、正倉院の極めは、正倉院の極め



が、其時候補と云へば木内申古がバラクと云うれば黒  
柿の厨子と文樫木の厨子をいひ連入の後雨を  
破壊しと云く云りてあるが、古い間破壊のま  
まよのまゝとておれことが知らるる。明治五年初の  
と清物をお見しと云う。目睹後と云うると、割れ地のま  
い如何にも光東と云うてある。室氣も縮んで  
と、そのまゝ消けて仕舞ふやうなところであつたと云  
ふが、今も墳墓を築いた時と云う。かゝるゝ感があ  
る。

○明治五年洲本の時、寺に焼つた町田久成内由正  
雄鐙の式胤の内巻川の南側の日徳が正公流の確気  
りおねとてある。と云うと、徳と鐙りおねと古流の  
り。

あつた面が、あつた千軍以前の美術品を、解れて放るる  
一たかの状が、そのころ。倉又入りての子は、と云く

倉の内は、けのり七七をを、寶物 台上の合、南  
比入のおお、一、是、と、さ、さ、さ、の、あ、ま、中、北、の、瑞  
おけ、う、と、南、に、上、等、の、物、入、る、寺、跡、の、あ  
り、う、と、有、火、る、の、ゆ、え、に、ま、ま、に、開、見、込、の、由  
竹、見、込、凡、る、と、り、り、有、り、二、階、の、ま、ま、と、云  
何、も、不、置、と、又、三、階、の、所、も、有、り、倉、を、と、ま  
く、る、時、と、も、古、物、生、ず、時、と、人、々、の、心、腹、を、  
り、を、あ、ら、せ、と、町、田、の、ま、ま、か、田、屋、の、見、込、の、お  
の、時、か、見、込、の、時、に、来、る、心、地、と、と、ま、ま、校  
舎、の、内、へ、入、り、て、木、材、を、と、り、お、木、の、ま、ま、と、い



る為候と見え心配し木杖たき何と云く木のあら  
無くし二年より口しん土の如く散つと見え此  
後面白きと見え一統欠どしき事知る事一  
通り又とゆえり

倉下に幕を張りし者人を録し日夜付らる、先  
角千有為年の古物に不手きわの細工あり者り  
一か是ら一向雨らん不造と思ひしが今〇現此器を  
一統するん宜敷國を是ら見え居る事ハ  
リと習きし又柄勇炸一統するん融金ボも  
切り入るに極め宜敷物ある事山奥に寄  
申及一統習きしは吉市場と知し  
る十三〇の條のし

三〇

其器は山奥の奥よりと見え是れと習らる事出  
し及時より人の習きしは吉市場のし  
十五〇の條のし

七寶鏡背はコハク、ヌイマイ、クシヤウ石等  
漆を固めし物也是れこそ宜敷の七寶のし  
寶物と入る事今〇七寶のギ七寶也七宝鏡  
也

寶物検査の條のし實際の徳候に左の如く候  
なり

車大寺に公候寶物検査今日〇を終る也此が  
検査人員毎報出題の所ハ其之を見入行  
く心配し休りも無く又早朝も楽一と







誰か何と言つても兵隊被地面をより強く感じ  
たのへまゝ。例へば地面に落ちる自分の体をまへつた  
押しつけた場合とか、強敵に打たれ死の恐怖ある  
顔も手足も地のやま深くもぐり込まれるやうな  
場合、地面の兵隊の唯一人の友を、沈黙の  
沈黙と保護のやまに向つて呻くの地。地面  
はその静るをやめてくる。それからキキと次  
の十秒の間の生命と走ることゝ手を放し  
てくる。それから又捉へてくる。或は永久  
に捉へて放さるゝことゝあるの地。

戦場を打ち抜く戦いの母、真に土地がある。爆弾が炸裂  
するその危険を無き最後、逃げの場をとり、地面の  
まゝ土地を自分の足元とすることゝ来る。  
或は掩蔽するところある身もある。長柄の念が切くと共に  
人の土を救ひを求め、外へ出る。理想もきく土を志が切つ  
く、突かす意母、哀をともごきし、土を志が切つた  
土を抱擁する。弱くも危険を急わく、まゝか少く  
まゝ。急し土が救るやうな世界の大敵にあら  
り、五割七割も多く人が死んでおる。

○先頃大隈熊子と別邸に訪れたが、女流の書翰に就  
きりよく流し出た熊子刀自に、加藤高野の未亡人  
こと江戸の娘の記、園に於ての考案の名人と評す



自分し音をえんは方術と成るもあはれき道差  
上へ卑しを他と別をどう一東の方術を推く  
来らん折しも来客あり。まゝ妨げんと貫ら  
ひ受らるゝあしき辭しあうたふか。あしき辭しあしき人  
を以つて程々の物とせ。おくり紙へんやう。まゝの  
果は物もあはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
んや。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
邪に打おれんはことや。漸く念し思ひ立身正を  
訪し。あき人の甘言を中ひゆら来り。清を杖  
をねえしはこときを細かに認めあう。公体。別  
はてしなく柔し。流るる。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
り。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら

建永



時ニ暮る今池ニ在りし。半果計岩崎の家。粟を食み  
る縁園有り。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
流の者前乎。縁を。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
いふ。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら

くは位名江戸を移し。朝夕の烟をあいしと  
詠めくらしつ

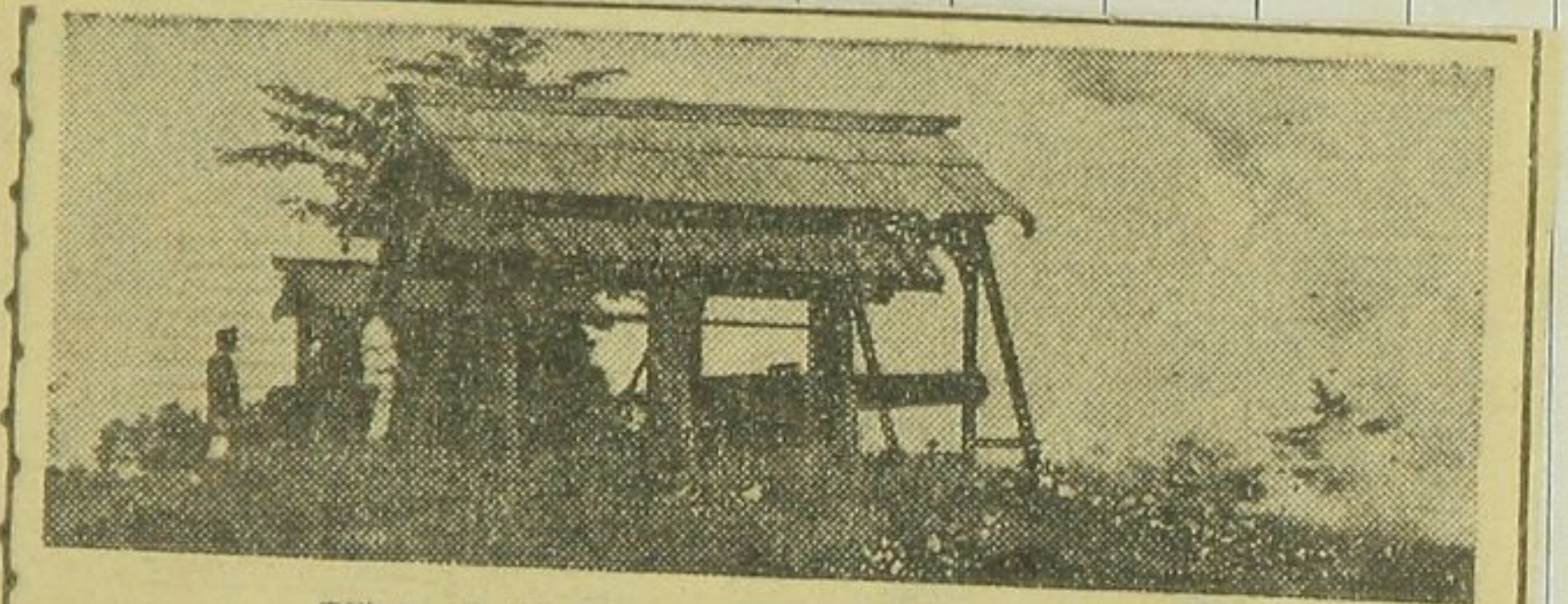
生ん時をそこらとせり。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら  
死ん又くらしつ

定家とい似を。あはれ許の長前をも熊子刀自らと送ら



千人一首あふかきのかて  
 せもうも我任書ハ都也や  
 此、又の教子九品もあふ  
 身柳ニ座あハ八景の歌歌ハ可、歌ハ久々  
 シ甲七ハ八景の兄主ガ、  
 鏡甚秋月 扇子時月 時甘知鏡  
 甚子通の 塗桶首雪 翠柱首  
 行夜夕也 悦築物紙  
 甚子ハ金を豆くか、夜ハ分利く、塗桶ハ  
 綿を延、ちス、るんハ雪がき、悦築ハ千、拭  
 扱ハ帆、見、ま、つ、り、以、也

標原製



△ △ △ △ △ △ △ △ △ △  
 ドンの慰勞祭執行

明治から昭和へ六十年間  
 功績を稱へる催し

明治、大正、昭和の三代六十年間  
 忠實に東京市民のために仕へた午  
 砲トンの慰勞祭が二十七日午後一  
 時日比谷公園で行はれることにな  
 った。白下助役、藤井教育局長、  
 池田製菓等出席、號砲トンの六十  
 年にあたる永い功績をたへて賑  
 やかな除穢式を行ふのであるがこ  
 の機會にトンの半生を回顧して表  
 彰文としよう

六十年前、二十四斤青銅製加農砲  
 のドンが五キログラムの火薬をこ  
 めて當時の市民のチョンマゲがま  
 だ半分も燃つてゐる市の真中、舊  
 本丸から鳴り響いた時、江戸ッ子  
 はこれこそ文明開化のノロシとも  
 驚こえたものだ

このドンは明治六年八月佐賀藩  
 主松平肥後守の臣木島屋大夫が  
 黒船襲來に備へるため淺草島新  
 堀砲臺物師屋吉、小傳馬町鐘物  
 師久右衛門の兩名に命じて造ら  
 せたもので二十二門のうちの一  
 つである。一門の代金二百九兩  
 二分であつたといふ。この加農  
 砲は當時文久三年五月馬關海峽  
 【事實は慰勞祭を行はれる午砲】

大政官布告  
 明治四年九月九日  
 日日正午ニ大砲ヲ一發發射  
 スルコト















か日本人に北極の事があることと興つてゐることを忘るゝ  
ハラス。

○改正公報のワウレン江射動を奉し此の一九二〇年  
川部と羅のこと絶ることと興つてゐることを忘るゝ  
人とする、北極の事漫の事化の甚しく、  
ぬ目まめきさる陽氣あるつき、一掃をさる江  
ニ初うなるが、自休に影射あり久方振る風  
を覚、例とを病病の案及又カマン起る  
日後をこお臥すのこも得るさるあり、除起  
後をこ送うなる近年さるさる  
葎中まゆとほく、  
橋南谷の東西海記さる、  
橋南谷の東西海記さる、

橋南谷

### 鐵相の電鈴と同時に

## 清水トンネル見事貫通

きのふ午後二時五分

交通史上に輝く爆破の偉業

全長六マイル一分、世界第九位、日本第一位、工事期間七ヶ年、従業延人員二百四十萬人、と物々しい数字をもつた清水トンネルは、  
定通り廿九日午後二時五分江木鐵相が電氣ボタンを押して最後の爆破命令を傳へたと同時に  
長岡口からの爆破により開通したこの日午後一時半から大臣室に江木鐵相、青木次官、久保田運輸局長、黒河内建設  
局長、池原計書課長等が集まつて緊張した面持で日本交通史上畫時代的な午後二時の來るのを待つてゐた、江木さんは腕を下して煙草を  
口に黙り込む、二時三分前江木さんは立上つて時計をみつける、現場と打ち合せがすんで二時五分、親指を電氣ボタンにのせてぐいと  
押した、紅の豆電球がパツとつく、廿秒間、沈黙がみなぎる、これで電話線を通じて現場のサイレンがなつてゐるのだ、ボタンから手  
を離した江木さんは激しい顔をつくつて「ホッとした様にニコ／＼する、二時十五分現場からの電話のベルがなる、受話器を取上げてき  
いてみた三好技師が「通つた」と叫ぶ、江木さんは相好をくつして「アハ、ハ、ハ、萬歳、萬歳！」と拍手する、皆が「おめでたう」と  
大喜び、二時四十分の電話では「完全に貫通した、祝儀の交換がすんで、電話線をつないでゐる」と報ずる、ついで三時「高岡口か  
らいつて右側の地上七尺の所に徑三寸、長さ三尺五寸の穴があきそこから兩方で喜びの挨拶を交はした」との電話があつた、皆が手を  
のばして拍手のまねをしてニコ／＼笑つた、これで清水トンネルは完全に貫通したのである

### 慶賀の至り 江木鐵相談

電氣ボタンを押して、見事貫通の成果を得た江木鐵相は重荷をおろした  
やうにホツとして語る「七年有餘の歲月を關し非常な困難と戦ひつゝ、今年  
今日たゞ今を以て最後の爆破をいたして世界で九番目のトンネルが貫通されることゝなつた、七年有餘の間數多の困難をかきあらゆ  
る技術の粹を集めて努力された従事員に對し私は國有鐵道を代表して感謝の意を表する次第である、このトンネルの貫通により北越並  
びに東日本一帯の距離は六十一マイル短縮され、時間では普通列車で五時間、急行列車で三時間を短縮した、この事業が完成したのは  
わが交通經濟のためにまことに慶賀すべき次第である」



耽古堂とありは幅三寸許あり、此人の著を誤ると  
思ひ之を尋ねては、此の幅三寸許は、誘見字を  
ある。南総の金谷の冠の記より、好きなる先輩  
より、耽古堂の幅を三寸許と記す。此人の著  
七寸ありと見え、四年の頃、自分をも、先ハしめ、  
西遊記より、此方、京都を中心として、東奥まで、  
越記より、西四の節と、西遊記より、左に記す。西遊  
記共、後編あり、徳一七二十冊定、以、年、の、出  
版、に、係、る、著、者、南、総、の、醫、術、の、修、業、者、と、今、も  
漫、稿、を、思、ひ、ま、す、二、篇、を、左、の、こ、と、五、ヶ、年、の、長  
き、及、此、の、遊、記、の、別、の、記、の、長、と、二、篇、の、記  
録、より、遊、記、と、越、記、と、云、く、は、記、行、の、如、く、云、

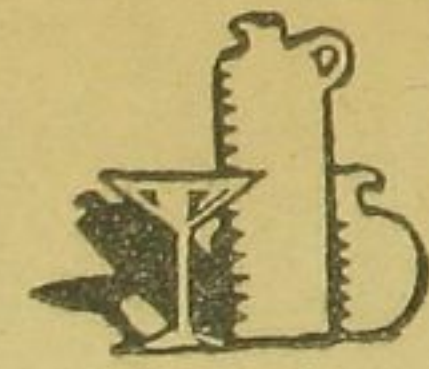
各記行の体、道す。遊業修業の別、尋ねる。其  
行文も、材料も、送る。其の具、氣、さ、す。若、る、は、  
談、話、の、子、の、後、を、記、す。其、の、河、を、所、す。純  
然、に、地理、的、記、述、を、今、地、の、山、川、風、俗、の、記、述、等  
の、自、ら、定、め、る、特、に、余、に、聽、き、な、る、よ、う、に、  
あ、る、是、の、よ、う、に、徳、一、七、の、遊、記、を、而、も、若、る、は、  
特、の、書、を、著、す、有、眼、に、ま、る、に、遊、記、を、さ、す、記、述、を、  
其、の、遊、記、に、し、て、後、者、を、し、七、卷、を、数、れ、る、所、に、  
あ、る。此、書、の、別、行、さ、す、は、古、時、地、業、の、大、い、な、行  
記、行、の、よ、う、に、地、業、の、形、式、を、記、行、さ、す。此、の  
遊、記、七、卷、一、冊、の、成、り、に、  
若、る、は、二、冊、の、遊、記、の、如、く、云、く、は、遊、記、の、如、く、云、







(七)



酒と人

市島春城

貴社の新年號に酒豪傳を書けと進んで申越されたのに恐縮した。そんな事を書く材料の都合せもなく、亦そんな事を書いて見ようといふ心懸けもなかつた。併し私に特に酒に就てといふ要求の来たのは私に酒を嗜むことを知らせてそんな酒を嗜むられたのであらう。新年は酒を嗜むのが各地の例ともなつて居るから、適當の思ひつきかも知れんが、私は酒は好むが量は少いので、酒豪と云はるゝやうな相手を持たぬ。唯だ私の酒の經歷を語る内に幾人か相手が現はれる。その中には酒豪と云はるゝ人もあり、そうでないものもあると思つて貰ひたい。

私は九州から順に隔絶してゐる市島の越後に生れた。雪の深い國だから自然酒に親しむ習慣がある、お恥しい事だが、私は酒を愛する家庭に生れた。私の幼年の頃の眞學先生は皆酒客であつた。鐵護寺といふ寺の住僧は山伏で詩を善くし、勤王家であつたが、本を教はりに行くと、どんな時でも必ず、爐邊に酒を燗しながら来たものだ。芳野金陵の高足と云はれた、肥田野竹場、鹽谷岩隆の高足で帝大の教授となつた星野恒博士も幼年時代の師で居るが、飛田野は粗豪の人で酒を呑むと吾々子供を相手にして遊戯をするやうな愉快の人であつた。星野は謙遜の人であつたが、頗る大酒で酔中では鐵護寺を維持した。私の幼年の時に戊辰の戦争があつたので、いろ／＼の

豪傑が郷里へやつて来た中には、酒豪も少からずあつた。その中にも秋の亂に前原一誠と刑部卿の密と消へた。奥平謙輔などは頗る大酒で。私の家に度々来たが、いつも酒から飲み出して夜に到るのが通例であつた。戊辰後秋月種樹といふ人も私の家へ遊びに来て幾晩か泊つたが、酒客であつたが照樣だけに上品な方であつた。私の幼少時代の環境は、こんな譯であつたから私自身にも酒の趣味は自然に生じた、實にわるい教育を受けたことを悔むのが今となつては悔ひても及ばない。

私が東京に遊學した頃は書生は皆善く飲んだ。同窓に下戸があればそれを輕蔑した位であつた。其頃は毎晩天麩羅屋程度の小料理屋に酒を買つたものだが、囊中の輕い頃だから、餘り奇抜な話がない。大學を出て郷里の新聞に新聞記者をした頃、新聞には士俸出身の人が二三ゐた。皆酒豪であつた。岩崎家の新報に於ける財産の管理者と云ふ箱で来てゐた酒豪といふ

一面芝生の廣いものであつたが、其の豪奢振りに驚いた、初見の私を歓迎して夏だから特に庭の真ん中に涼み臺を幾つも置いて席を作り、盛んに飲み且つ談する。多くの侍女は涼み臺の周圍に立つて酌をしたり扇扇で風を送つたり間断なく種々の下物を持つて來たりしてゐると、忽ちに驟雨が來た。主人は此雨は養れるといふて侍女に言ひつけて雨傘を取り寄せ、兩人の後からそれを立てかけさせて平然たるものであつたが、段々雨が強くなるので終に座敷へ席を移したが、それからが長く、十一時を過ぎては雨も止むことを許されなかつたのは困つた。あの人は確に酒豪傳中の一人である。

歸するにどんな薬を用ひたかと思つたら、薬庭は尤も利く薬は行燈の黒だと言へたので一笑了した。實は神醉を醫する薬はない、併し誰れも經驗のあるやうに藍燈頭にするとおのづから酔が解けて酒を思ふやうになる。行燈を薬に擬したの此故であるが、黒燈の二字が振つてゐる。寺崎は酒を飲むと腹やかな男で汽車などでよく酒を飲んだが、車中で傍若無人……踊り出すのは困つた。新湯あたりにて數ヶ月流連して、多くの収入があるのを無茶苦茶にバラ撒いていつも歸京の時は借金を土産に持ち運つたものである。幸田露伴も興到るとなかく飲む、近年は無沙汰になつてゐるが、前年兩年餘りかけて巖山谷の八百善に飲んだ時は、私は酒時代であつたので幸田も遠慮勝であつた。私は一計を運らし其の得意である釣の事を持ち出すと同面が怒ら開けてそれから愉快に飲み出した。私は終りに釣りに成功したことを思ひ出す。長田の酒に就ては餘りに材料が多過ぎる。特に書くにも及ば

ないであらう。酒豪天心(三)もなかく好酒家であつた。往年朝早く根岸の居へ尋ねた時、煙草盆が出ると思つたが、朝から酒を出す家は稀だ。兩食は狂言が連番で料理屋などで行き過ふと必ず長篇の狂言を私へ寄せ、談笑に代へるのが常であつた。山川男爵が帝大の教授であつた頃、私共は物理學を教はつた。ある時同級生の二三と先を訪ふと先々大きな飯碗で冷酒を出して茶の代りだと云ふて勧められた。あの人も確かに酒豪傳中の一人である。昨内追進などは酒の話題に上らない程養生をやつてゐるが、實は相當の量がある。あの人の熱海の別荘に泊ると、座を並べて晩酌をやると、あの人は氣が短いの一杯の酒を一口口に飲み乾す癖があつて、其の早やいのは逆も太刀打が出来ない。

實業家では安田善次郎などは酒豪である。時々節酒をやるやうだが、ふ人や名を忘れたが裁判所の判事某が酒豪で名高く、或る時三人盛んに飲んだことを思ひ起す。酒と私とが辭し去つて後、裁判所の先生だけが座に残つて、酔中盛装した藝者の衣服に酒をブツかけたこととが醉後に氣がつき、夜の三時頃に藝妓の家を叩き起して詫をいふたのは如何にも眞率だが、藝者屋では衣類を汚された其上に深更に起されたので大いに閉口をしたこともあつた。

私等の帝大の先輩であつた千頭清臣も士佐人で酒豪を以て任じた。此人が新報の知事となつて來たので或る日語ひ出して飲んだことがある。此人の流儀は大きなユツプで飲むのであるから、私は到底太刀打が出来ない。そこで内々酒量のある藝者を呼んでそれを伏兵として酒豪を試みたが、千頭はこれには參つた。翌朝新聞へ出てゐたこと聞いたから偵察をして見ると昨夜は下駄穿きで官舎の寢室へ入つた程の大酔で、今朝も頭が上らぬといふを開き、凱歌を奏したことがあつた。

と直ぐに仲がよくなつて仕舞ふ、地蔵正直もよく飲む、あれが兼酒國の亞米利加大使となつて行く時には氣の毒なやうな氣がした。併し實際は氣の毒と思ふことが野暮であつた。あの人に案外とするは、酒量があるのみでなく、内外の酒に通じよく研究がつんでゐることだ。



供御笑讀

乘飛行機賦并序

篁溪佐伯仲藏稿

今茲昭和四年八月。海防義會購獨逸雄加斯式金屬製旅客用飛行機。命名第七義勇號。貸付之堺市日本航空輸送研究所長井上長一氏。以援其所營大阪高松松山間定期航空之業焉。蓋我邦民間航空。尙未至大行。義會夙憂之。貸付飛行機於民間者既六機。將欲資航空事業之開發。且一旦有緩急。獻諸海軍以供國防也。是月十日。舉貸付之式於研究所。余叨以義會事務長。隨理事長伊藤乙次郎氏。列式筵之末。翌日午前十時。與伊藤井上二氏。同乘其機。發堺浦。食頃之間。攝播諸邑。取次沒影。所謂瀨戶內海者。忽焉展開于眼下。金波汪洋。銀海透徹。若燃犀照怪。島嶼之某布者。如苔石點綴。船舶之往來者。如水禽浮游。香爐之噴煙者。四阪島之伸銅所乎。蝸廬之群聚者。今治市街乎。所觸目不辨小大。所向之地。轉瞬變化。隱顯出沒。左右送迎。應接無暇。不覺絕叫快哉。而機體安靜平穩。書可讀。字亦可寫。非若汽車電車之動搖不已。輪船帆船之傾仄簸揚者矣。既而機稍緩稍下。悠然着水面。滑走數分。正午到高濱海津寺海岸而止。松山市乃下機而憩格納庫。始爲地上之人矣。蓋自堺浦相距約三斗料。而飛翔僅二時間而已。吁亦神速哉。若夫輪

船。要三十又二三時間云。時適值陰曆之秋七月。而同乘者又有二客。因戲做東坡赤壁前賦。爲文示之。且諭世之疑虞飛行機之危險者。使知其安全快適在意料之外。想使東坡讀此。未暇罵余文字之優孟杜撰。反羨羽化登仙之樂果如是。必爽然自失。恨不生於今之世歟。

己巳之秋。八月初旬。佐子與二客乘機。自堺浦飛行於松山之間。天氣晴朗。雲歛風馴。縱一羽之所如。凌昊穹之蒼茫。少焉掠神港之畔。達明石之上。仰誦歌聖之詞。俯覽淡島之勝。於是喫茶樂甚。鼓掌而歌之。歌曰。銀翼兮金翔。搏扶搖兮逼彼蒼。渺渺兮予懷。望美人兮天一方。客有能長嘯者。劃然一聲。悽壯碎鈎。可下以裂金石而驚怪精。發千古之曠懷。動今日之徑情。佐子悚然聽之。昂首而問曰。何爲其然也。客曰。南望屋島高松。山海信美。此非平家之困於源氏者乎。方廷尉一軍。輕棹渡海。高松先歸掌裏。固謂之疾雷不及掩耳。然以今觀之。何其費時日之多也。吾與子生數百年之後。駕風驅雷。侶鳶燕而友鴻鵠。翔翔雲霄之上。評興亡之迹。捫天門於空虛。縮地軸於頃刻。驚事物之進化。感時代之變革。欣吾生之壯快。吐氣焰於口笛。佐子曰。客唯知在彼之小。而不知在我之大。夫地球者。亦宇宙間一大飛行機也。吾人生於斯。長於斯。俱棲息其上。晝夜回轉。同其追隨。故耳未聞羽翼之鳴動。目未見球體之遷移。而自不知其翔飛。然其迅速之時間。長遠之距離。與堺浦松山間航路。不啻爲幾萬倍之差。常時高飛捷行。無所間斷。而今日吾人之



行。是非。暫離。本體之大機。以試。小技者耶。遂拍。肩相笑。清風生。於腋下。白雲。起。於脚底。不知。既近。降機之時。

内田遠湖先生曰。以漢文。叙飛行機航遊之事。蓋以此篇為始。一種新穎文字。令讀者氣暢魂飛。

青木豐陵曰。筆力汪奔。善狀難叙之景。蓋得法於髣蘇。而變其面目者。一誦三歎。再誦不覺施圈。妄批多罪。

石川文莊曰。叙事綿密。寫景清麗。擬東坡赤壁前賦。而奇想出於人意之表。使讀者無疑飛行機之危險。則亦是有用之文。

駒田侗齋曰。叙新事實。以奇拔之筆。雄絕妙絕。痛快痛快。  
岡 彪村曰。篁溪蓋亦當今之列子。

酒、名も不々々かえさる。伊勢屋の  
酒、のよそのどぶろく

伊勢屋をよき返し  
あしとよみ、乾波の人やん

れあしとよきとよきとあま

地歌、のり、今日の物語、あるよ、北極星  
の梅園の記、ある也

○奈良の古物園、お宝屋、その昔、支那  
人をとらふ、あるよ、の物語、あるよ、その次、日  
本の名、今日の如く、偉く、支那人の誤つて  
琉球のものと、あるよ、と、樊榭山、房、集、集、  
見、わ、ま、ん、の、疾、市、古、梅、園、の、苦心、集、集、



墨に誤字を掃拭して無痕をらししは、  
古の支那人もこの感嘆を著し、  
梅園主人松井元泰が自ら墨を掃拭し記す  
の所云く

墨言文字、無差誤者鮮、古今用雖  
試之者衆矣、然其色與素地不類正焉、  
且難速乾焉、病之者不少也、余今  
一員以公請四方、其用不似破也、  
就誤處以摩擦之、用指頭收之、而  
施正字於其上也、則形狀為絢、一掃  
故笑、嗚呼、其功或乎如王衍、  
使人知其言之玷、痕者也、因命曰王衍



墨云

○金銀の箔打紙を支那の賈紙と云ひ  
日本は、凡そ名紙といふ、こゝろを面を拭  
け、よく、脂を塗り、浴びて、如く、  
此の名紙と云く、今婦人の用も、  
紙七、凡そ名紙と名く、へき、  
いのも、今の婦人の吸紙、  
紙の似たり、此等紙の給、  
るを、朱を包む、用、  
口授

○卯酒の朝酒を云ひ、支那の、











園の地より宝海將來と號とし、李家の名墨は、大  
師の巻化の後、百五十年に在りしとき、  
ハ口者の考証と見えておる。

○布袋の像より一形式ありと必ずし、肥大の腹ある  
を其の特徴とす、然るに此の形式、  
玉圓講本九十九冊に其圖あり、何人か見せし後  
世布伝ふとす、而して其の解説より左  
の如くあり

右玉收佛像長三尺闊二尺四寸、厚寸一分五  
色淡琥珀色、胎心琢刻、楹引如來、法相慈  
容、慈心南、真、西、方、聖、人、之、瑞、相、也、上、刻、楹

藏

川、來、河、彌、陀、佛、ハ、五、方、刻、保、大、年、供、夫  
保、大、南、康、李、環、之、年、號、也、此、像、其、之、南  
康、宮、中、所、奉、者、也、

取、の、記、大、なる、よ、を、直、ち、の、布、伝、と、す、可、と、を  
こ、こ、こ、ん、と、え、さ、し

◎

○毎年、の、者、に、法、を、こ、と、種、々、の、お、も、贈、る、の、中  
に、玉、圓、か、ら、字、も、甚、く、よ、し、あ、る、と、其、の、由、を、法  
の、あ、ら、ま、か、知、ら、せ、珠、と、さ、る、こ、と、し、ん、妻、が、坊、を、  
と、し、の、の、妻、の、記、成、つ、ま、あ、ら、納、進、を、依、る  
る、つ、と、こ、も、送、つ、ま、あ、ら、ち、と、さ、る、と、さ、る、  
容、易、な、消、費、の、法、か、ら、の、切、手、の、十、一、元、を、  
こ、の、合、共、し、て、お、申、に、由、例、ひ、と、あ、ら、ま、



めで被りも多しければ、自分も主人の納豆の味を陰  
夜から寝る年のあけし無くせうし、（？）のよきうそ  
の、東京の納豆のよしの無し、（？）の人が自  
おもこのよきも、（？）の納豆を心すること  
し、（？）の納豆を心すること  
との都人士の夢も、（？）の納豆を心すること  
か、お中面倒るものあり、（？）の納豆を心すること  
も、（？）の納豆を心すること  
ある、（？）の納豆を心すること  
エロテウらひあるものあり、（？）の納豆を心すること  
を心すること、（？）の納豆を心すること  
関係がある、（？）の納豆を心すること

建河

ののり、（？）の納豆を心すること  
の、（？）の納豆を心すること  
めと名つづき、（？）の納豆を心すること  
と云ふ名がある、（？）の納豆を心すること  
こやうし、（？）の納豆を心すること  
とある、（？）の納豆を心すること  
ひある所がある、（？）の納豆を心すること

納豆は一種のチーズである、胃に入らう、（？）  
既に、（？）の納豆を心すること  
北海道の農産物大の、（？）の納豆を心すること  
納豆の試験を、（？）の納豆を心すること  
ババクテリヤが、（？）の納豆を心すること

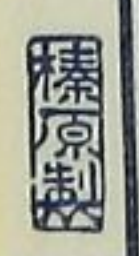






と獲し今も筆中のあり。他は松村双松英詞しりをも  
収めたり。其圖の着意甚く在り。吹若亦「放懐」  
と題す一冊を得たり。松村双松文を収り、村田尚  
風の子村田看如各文の未一律を題して画ハ乃ち松  
沙也。此巻中文七詩も敢て在りて受へられ  
松沙の書も五ふんぞり。此冊大正十四年の出  
版に依り、松沙の著、漸やく老蘇の域に入り  
たるを笑ふ、旬日病床に在りて、東村枕頭也と  
を四五さす時に、矢観しん老聊とある、  
感を好む事すともや

○七編を認めん此ことし七巻入んとす、例のことし日誌  
の末尾に一年間の輯を際立つることし、カビキ工



シートあるをえりとも、案めり紙教とある記すが  
ある。ことし七巻(由)に歳を月〇を美とすころに  
やうな氣がする。世に不気味のドン底と云はん  
案編の風志きり、吹きすさむ、身氣氣空氣  
の呼吸のいどるころか、病床にありて静  
かに冷やんをえり、を家日松を、例年と松の  
の事ひか母さく。志きり、編輯するころの仕掛  
と見も考ふるの賜え、一年放漫の愛ころり  
や法抄残り、細大集の七つ七巻、并らう二三  
る同紙也、すうが例に、陰起に利らぬ、松葉井  
かつかぬ、よの事し、不気氣の、南雲の、開教  
故、大吹の、前、凡そ、知宅の、出来たり











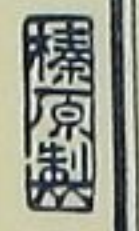
先づ千代本が二本並の大きき本最二一杯のまゝに  
あり外に家前邊子やすつるもおしやお清徳  
西條巻るむいゝまゝに書こき入つておれ。早稲  
田に傳へたのいゝん丈があるけん外に千代文  
庫の一本いゝん丈に流澤氏とあるてあつたや  
うに記懐する、その中よりいゝくの及故が収め  
らるゝおのて書書とてひめひるゝことあり、  
其内のあつたもの自令古書と見れことかある。總  
てのあつたつたのいゝ印字もあつたが敢て先  
で除いた譯むもさうだが、まゝに取らうと  
あつた氣がつつて取つてまけはうかつたと思ひ  
のい馬場死の各本からの書簡が或束かあつ

馬場

此馬場の遺族の事一向まゝを保存する  
氣もさういゝから精製の手あき紙にしたら  
しいが惜あふせにさういふを歩へたが、多分馬場  
の遺什、あつたさういふ出して總て遺に跡手  
を取らせれういゝと思へる。扱て總て遺る家  
計上の都合いゝんをさういふとさうて来たのいゝ自  
分が早大の圖書部長のうし時、圖書刊行會  
の経費にやつて居た時だ。總て遺り江戸見流  
の氣味いゝる利ま扱めて漢語のいゝの類の古  
物が早稲田に保管さういゝ本印に價のいゝる  
田いゝまゝいゝと云ふことであつた。自分いゝ直に  
送してさう運ぶんは古物を見さういゝ者のいゝ豊



富であるのにおもてをし喜ひし。其の譽の危  
家の名物として福利の多くとおびかえさるゝんか如  
めであつた。目合の敢てみづから求むるべき書  
者からの申出ひあるのを喜んじ、其の書は早  
稲田の圖書館に不時に五方町の圖書館  
を支出するに足る困難であつた。ふんを  
どの珍書を理解するに足る所内も是れ  
又無つたので、幹部の相談に付て、彼等の書  
架に之を置くに足るの書庫に之を置く一時  
圖書刊行會も之を出版せしむるに  
之、支出し、圖書の一年約七自分の私宅に留め  
て置くに、金庫を通過し、深い興味を感じた。中



七自分の興味を感じた。其の書庫に之を置く  
多く冊数七あつた。馬場の音目：流しに次ぎさぐり  
を先末さるゝ書に之を、息子の安に口授せしめか  
せし福をのあつたのを、世間より大徳の答  
信のいくらか教して、所謂の心算を、大徳の  
不、皆、其の理を、その由、ある、お、ん、け、い、美  
と眼目がある。自分のあつた、移るを、敬ん、ひ、ある  
この刊行會も、取り入る、刊行せし、其、早  
大圖書館に、馬場の、遺著の、後、後、後、後、を、か、ら、き、  
自分の心、に、解、題、を、印刷して、来、る、を、欲、つ、た、本  
此の、展、覽、會、に、概、縁、を、な、す、と、音、字、校、の、囁、き、を、  
し、音、生、に、馬、場、の、任、歴、を、評、し、就、て、評、議、は、









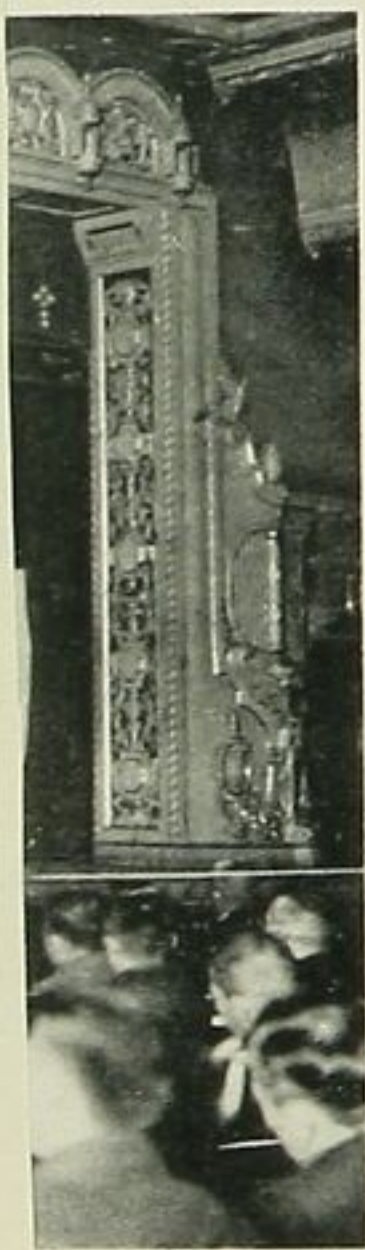
## 紅葉山人

市嶋春城氏講演

尾崎紅葉君の記念の展覽會が開かるゝので、何か申上げよと云ふ事であります。實は紅葉君を尤もよく知つて居られるのは、只今お話になりました江見君、續いてお話に成ります巖谷君、此兩君以上に人は餘りないのであります。殊に文藝に關係ある話は此の兩君でなければならぬのであります。私などは硯友社に屬して居るものでもなく、文學者でもありません。只紅葉君の存命中に相當な交りをした位に過ぎないので、實は斯様な席へ出て、お話ししてよいか悪いか自ら知らん位な事でありまして。所が、三越からの御案内では、硯友社以外の人が一人位加はつて話をして貰ひたいと云ふ勧誘でありますので、實は罷り出たが、私の存じて居りますやうな事は、實はこれまで色々な折に話をしたり書いたりしましたので、別に新しい話はありませんが、併し折角出ましたから、聊か何か申上げて見たいと思ひます。

私は先刻三十分程前に此席へ参りましたが、丁度江見君のお話中でありました。佐渡のお話が出ました。其の佐渡のお話中に、私の誤りをお正し下さつた點もありましたので、それらの事に付いてお話し申したい事もあるのであります。一體紅葉君が亡くなられたからと申して、此のお席には御親族もあるかも知れない。と、考へなければならぬので、餘り色々なロマンスなどを語つては、どうかと云ふ様な考へも起るのであります。又私は、江見君、巖谷君の如くロマンスを語る程の旨い辯舌





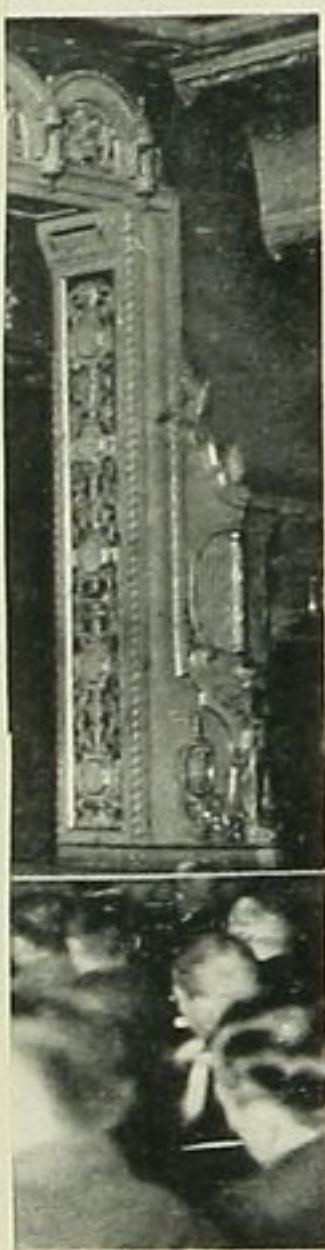
を持つて居りません。旁々ローマンスじみた話をするを躊躇しますが、よく考へて見ますと紅葉君はローマンスの人であります。否なローマンスの製造家でありますから、故人を偲ぶ爲に聊かローマンスに觸れた所で敢て故人を汚すことにはなるまいと思ひます。又御遺族の方々もさういふ事であれば、お怒りになる事もあるまいと思ふのであります。即ち先刻江見君が云はれた如く、佐渡一件も濃厚な戀など、云ふ眞面目な戀があつた譯でもないのでありますから、聊か先刻江見君のお話を補ふて見たいと思ひます。

私は越後の者で、越後は佐渡を向ふに見て居る所でありますから、自然佐渡の事に付いては、時折私の耳に觸れることがあります。先刻江見君が話された「いと」といふ女に就いても、一番早く私の耳に觸れたやうに思はれます。紅葉君が此女に何か書いた物を與へたと云ふ話も當時聞きました。いづぞや紅葉祭を紅葉館にやりました時に、私が其席で佐渡一件を話しました。是が江見君から云はれますと、私が、間違つた種を一番最初に蒔いたと云ふ事に成る譯であります。兎に角佐渡へ紅葉君が行かれた折の事を披露したのは、私が一番最初であつたと思ひます。其節は詳しく調べる暇もなく、聞くがまゝを申したから、粗漏な事もあつたに違ひない。後に調べて見ますと、「いと」に與へたものは火事で焼けて了つたと云ふことです。それは原稿と云ふ様なこみ入つたものでなかつたことも分りました。私は今日敢て江見君からお正しを受ける迄もなく、原稿を與へたとは思つて居りません。若し私の隨筆にさう書いてありますならば、それは全く私の心得違ひであります。それは兎も角もとして佐渡の話に移ります。

一體佐渡は、紅葉君の爲に大分名高くなりました。わざと紅葉君の遺蹟を尋ねに佐渡へ行く人があります。江見君も即ち其一人で、探検の結果は江見君の近年出された隨筆に載つてゐます。小木には湯女の遺風が存してゐまして、藝者が客の入浴中素手で身體を洗つてやります。それ等のことも江見君の隨筆で拜見致しました。私の郷里にも、ボツ／＼江見君と同じやうに佐渡に出かけて、糸から昔話を聞いて書いた人もあります。ことしの四月頃でありました。私の郷里の江口秋情といふ人が、佐渡訪問記を書いて私に寄せて参りました。それを何かの折りに現はしたいと思つてゐましたが、今日圖らず其の機會を得ました。その訪問記は此の一束の草稿であります。よく書いてありますから、時間があれば、こゝに讀みたいのですが、そんな時間ありませんから。要點を摘んで申し上げます。此江口といふ人は江見君が佐渡に行かれた後に出かけたのでありますから、江見君の御存じのないこともあるかと思ひます。

一體紅葉君が佐渡へ行く事を志して越後の新潟へ見えましたのは、明治三十二年の七月、恰度紅葉





君が三十三歳の時であります。新潟には紅葉君の親戚が一人相當な地位の役人をつとめてゐました。紅葉君は先づ其の親戚の方へ身を寄せたのですが、紅葉君は可なり激しい神経衰弱に罹つてゐて、具合が宜しくなかつた。二三日も親族の家に居りましたが、終に佐渡へ向つて出發したのです。佐渡に遊んだ間が半ヶ月位でもありましたか、小木に居つた間は十五日と聞いて居ります。其結果が烟霞療養といふ題で當時の讀賣新聞に連載されましたが、完結に至らなかつたやうです。紅葉君は先づ夷港に着してそれから小木へ移つた譯であります。小木には紅葉君を崇拜する人が二人あつて、紅葉君を深切に世話した。其一人は小學校の校長で風間儀太郎と云ふ人、も一人は土地の有力者で藥劑士の伊藤文吉と云ふ人、これは後に縣會議員になつた人であります。此兩人が紅葉君の東道となつて、ある時權座屋といふ料理屋へ案内をした。(今は料理屋をやめて旅館になつて居る)その時の紅葉君の様子はどうであるかと云ふと、目は爛々として底光りがしてゐる。鬚は生へるに任せてゐる。髪も梳らなはいといふ風にしてゐたので、料理屋の嬬かあなどは大いに恐れたといふ話でありますから、如何に神経衰弱でむしやくしやしてゐたか窺はれます。風間などは權座屋の主人に向つて盛んに紅葉君の吹聴をやり、方今有名な小説家と云へば此人で、こんな人がこゝらへ遊びに来て、こんな詰らない料理屋へ來るなどは實に不思議な事だなど、吹聴をした所が、側らに聞いてゐた糸が小耳に挿み、そんな偉い人なら、一寸お茶でも差上げてお顔を拜見したいものだ、茶を持つて出た。これが抑々赤繩の結ばれる發端で、紅葉は此女が氣に叶つて、糸を假りの女房として、此家に居座はることになり、イラ／＼した紅葉君の神経衰弱もいくらか和らぎ、追々安眠を得るやうにもなつた。こゝに一寸云つて置きたいのは、小木邊の妓は客が定まると、終日終夜其の側らにゐて、世話女房の如く針仕事などをやるのである。紅葉君も浴衣一枚此の女に縫つて貰つた筈である。紅葉君が二週間も飽かず、小木に止まつたのは此の同伴を得たからであらう。紅葉君が小木で宿を定めたのは角屋(今は廢業した)であつたが、權座屋へ移つたから、宿は不用となりいざ勘定となると、角屋はどうしても勘定を取らない。紅葉君の評判が高かつたので、角屋はかりそめにもそんな偉い人を宿したのは光榮だといふて、何んぞ云ふても受取らなかつたさうだ。

紅葉君の小木滞在中に紅葉君を中心として、土地の若い連中が美人面識會といふを催した。小木中の妓は皆な會したが、皮肉の事には糸一人だけは其席に招かれなかつた。糸は非常に憤慨して寢ても起きても居られなかつたといふは、糸自身の述懐であるらしいが、成程同じく小木の妓籍にあるものが唯一人殘されるといふ事が、如何に不面目であつたか、それは想像に難くないのである。それがたまらないで、糸は紅葉君の所へ手紙を持たせてやり、どうか是非早く切り上げなさいと云つてやつた。





紅葉君も糸の情を思ひやつて宜しいきつと戻るから待つて居れど、あの流儀の男性的に返辭をして、歸つた其夜筆を走らして三味線の皮に書いたのが先刻江見君の述べられた「來いちやくくの唄」である。來いちやくくと云ふはこゝに一寸注解をしておきますが、佐渡の方言で「入らつしやい」といふことを來いちやくと云ふ。紅葉君は、それを濃茶に轉用して談諷を弄したのである。紅葉君は非常な茶好きで殊に濃い茶を好んだ人であつた。

紅葉君が小木を去つた其折糸と別れの段などは江見君が委しく本にも書いて居られますし、先刻お話にもなつてゐますから省きますが、餘計なことながら、其後のお糸はどうなつたかと云ふに、阿佛坊妙宣寺と云ふ名高い寺が佐渡にあります。是は後醍醐天皇の時分から、段々歴史的因縁のある寺であるのであります。その坊さんに望まれて糸は其の妻になり、十二年の間、僧房生活をしたのであります。さすがに僧院にあつては、人が問ひましても紅葉君の舊は語らなかつたと聞いて居ります。遂に住職と兎に角十二年の死に別れて、今より八年前、八木從造と云ふ質屋のおかみさんになつた。八木は七十歳と云ふ老人で、萬事を此妻に任してゐたと聞きますが、その良人はまだ存命か否か存じませんが、お糸は今婦人會の幹事をやつて、なか／＼ちやく／＼で、演壇に立つと、無暗に硯友社諸君を友人であるかの如く、江見君はごゝの小波君はごうのとやらかすと云ふことでもあります。さてこの女の容貌はどうかといふと、如何に辯護しても十人並外れの醜婦で、出ツ齒が殊に目につくこと申します。紅葉君はお茶人であるが、よくもこんな婦人に思を寄せたものだと言ふ人もありますけれども、全體あの人は義侠の人で、人の餘り喜ばん、又人に捨てられる様なものを愛する肌は確かにあつたかに思はれます。他に紅葉君の愛した婦人にも餘り美人は無かつたやうです。

最後に申さうと思つた話が番狂はせになりました。私が紅葉君と最初に知り會ひましたのは、讀賣新聞に私が主筆をして居た時です。紅葉君は毎日でもありませんでしたが、小説を書いて居られたので時々社に見えて、それから交が初まつたのであります。一寸年を數へますと、今より四十年の昔であります。當時紅葉君は既に名聲の高い人でありました。初對面の感じを申しますと、色の淺さ黒い背の高い鬚のない、眼の鋭い、物の言ひ振りはきび／＼してどう見ても生粹の江戸兒でした。先刻江見君が云はれたが、紅葉君のは男に惚られる男で無ければならぬとの自負もあつたやうだ。江見君も紅葉に惚れたと云はれたが、私も亦惚れた一人であつた。あの人は若い癖に親分肌の人であつたのであります。全體あの人は帝大の法科に學んだ人ではありますが、法律の臭氣などは一點も無かつた人で、筆を揮へば彼れが如き婉麗の文を爲すのであります。ごこまでも男性的で、運動會で競走でもあれば一番早く走り出すのがあの人でした。





紅葉君の有名な小説は皆な讀賣新聞在社時代に書いたのであります。『隣の女』と云ふ小説などは随分際どい所まで筆が進みました。そうすると、前島男爵から私へ手紙が舞ひ込んで来た。それにはもう危い。隣りの疝氣となす莫れと、注意をしてきた。當時は發行停止、或は發行禁止などいふやかましい災難のある時でしたから、私もヒヤ／＼しましたが、流石に紅葉君はうまく筆をそらしたので、無事でしたが、先刻も江見君の云はれました通り、紅葉君は非常な凝り性で、あの靈筆を持ち乍ら決してさら／＼と書かない。如何にも遅筆で、一字一句を噛み出すやうにして筆を下すので、新聞一日分の小説を書くに非常の時間を費し、往々深夜筆を把つて天明に及ぶこともあつた。硯友者同人諸君のうちでは、極めて健筆な人達はどん／＼水の流れるやうに書いて、朝のうちにさつ／＼と原稿を書いた。或時停頓を生じた。それは尺八の事を書かなければならんが、尺八の事は實驗がない。と云ふので當時向島に居た友人佐藤某を訪ふて尺八の研究に出かけたので、二日はかりどう／＼掲載が中絶した。其頃の讀賣の社長は本野亨と云ふ人で、本野外務大臣のお父さんです。編輯所へやつて来て私に頻りに苦情を鳴らすから、私は紅葉君を辯護して、さう言つた所がなか／＼貴方の考へる様に、さうすら／＼書けるものじやない。と云ふと、どうしてさうだ、あの位流麗な筆を持ちながら、さつ／＼と書けん譯はないと言はれる。いやさうでない、いくら流麗な筆を持つとも、あの小説は長い詩です。あなたも漢詩を作らるゝが、長篇をそうすら／＼作り得ますかと云ふと、さうか成程さう聞いて見ればと云つた様な譯であつた。それから原稿を取寄せて示し、どうです、こゝに張紙がしてある。此張紙が同じ場所に五枚も張つてある、と云ふて段々に剝して示したが、一番最初に書いたのでも拙くはない。それが氣に喰はんで一枚張る。又氣に喰はんで二枚、三枚張るといふ譯で、五枚に迫んで始めて満足してゐる。と云つて書き直した跡を比較して其の努力を説くと、社長も成程さういふ譯か、どうも感心なものだといふ譯で、漸く紅葉君も救はれ、私に禮を云ふて來た事がありますが、如何にも凝り性でありました。紅葉君は一向酒を呑まん人で、酒の代りに濃い茶を好みました。私などが書齋を訪ふて長座をすると、二度も出しかへる位であつた。夜中執筆の時も絶えず濃厚な茶を飲んだのである。あの人の癌の原因は恐らく茶にあつたやうに思ひます。

私はよく紅葉君と連立つて諸方を歩いた事があります。あの人は非常な食通で、いろ／＼の料理屋





を訪ふた。困つたことには三杯も飲むと直ぐ倒れて座中に寝て仕舞ふので、自分はいつも獨酌の形で  
ありました。或時山谷の八百善へ行つた。まだ八百善の繁昌時代で料理もよかつた。君は大層喜こん  
で献立を一々手帳に記し、複雑な調味を分析をして、それを一々手帳に記したものです。それから君  
は寫眞機を持つて歩く事もあつたのですが、どう考へたか有名な料理屋の臺所を寫眞に寫したいとあ  
つて、寫したこともありませんが、何分料理やではさういふ事を喜ばんのみならず、臺所は御承知の  
通り暗いものですから、餘り成功しなかつた。料理屋で君の最も喜こんで臨終の時迄取り寄せた料理  
は、日本橋の中華亭でありました。是に就いて可笑しい話と申すのは、或時私の友人で山田一郎と云  
ふ人がありました。是がよく中華亭に参りましたが、最初はまだ紅葉君とは相識らなかつた。なかな  
か悪戯をやる先生で、或時静岡邊の若い醫者を連れて中華亭へ行かけ、中華亭の娘お福に今日は紅葉  
を連れて來たと云ふて欺いたのであります。此娘は紅葉の崇拜者で、山人の作は何んでも讀むでゐる  
女ですから、紅葉入來と聞いてひどく喜び、一つ短冊を書いて下さいと云ふて、頻りに書かせた。賈  
紅葉も兎に角歌位書ける人であつたものと見なして、ごん／＼書いてやつた。さて其次の日私が行  
くと娘は喜こんで、紅葉さんが來てくれたと云ふ。私は誰が一緒に來たかと云ふと、山田さんが連れ  
て來た。そんな事は無からう、山田は紅葉を知らん筈だ。どんな人だと云つた所が、色の白い、鬚の  
生えた背の低い人であつたと云ふ。私は噴き出してそれは擔がれたのだ。私は今度本物を連れて來る  
からと云ふて、二三日たつて紅葉君を誘ふて参つたのが、抑々紅葉君が中華亭に觸れた始めであるの  
であります。それから長い間中華亭を最負にして先刻申したやうに、病中はこゝから料理を取寄せた  
と聞いてゐます。紅葉君の酒嫌ひに就ては次ぎの如き話があります。或新年に、私が年賀に参つた所  
先生まだ寝て居る。そこで外を廻つて再び行きました所が、席に尺八の事で前に陳べた佐藤某と他に  
一人賀客がゐました。新年だから祝酒が出たが、佐藤といふ人がなか／＼飲むので、酒が盡きると主  
人に會釋なく、手を叩いてごし／＼酒を取り寄せるといふ騒ぎで、自分はこう見へても遠慮深いのだ  
が、一方の相手がひどい遣口なものだから、ついそれに追隨した様な事さん／＼紅葉山人を苦しめ  
た。又紅葉君が死んでから日誌を刊行する事に成り、それを見ると新年の事でありませうから、第一頁  
に佐藤と私とを新年の悪客と罵つてゐるのに驚ろいた。紅葉君は氣に喰はぬことは、用捨なく筆誅を  
加へる人であつた。妙な事だが四十年たつて、先達、山階宮様に召されて参りました時に、宮家に奉  
仕する宮内官で三雲敬一郎といふ人が、やあ久し振りですね、私も紅葉から新年の悪客と呼ばれた組  
ですと名乗りを揚げられたので互ひに一笑した。後に日誌を見ますと、成程其人の名はあるけれども  
悪客の罵倒を免がれてゐる。成程宮様などに使はれる様な身分の人は、ごこか穩かな所があつて紅葉





君の罵倒も受けないうで済んだのでありませう。

紅葉君が讀賣新聞におました時分に、時々自から丁寧に寫字をやるので何だと云つて尋ねた所が、西鶴のやかましいもので、版本に殆どないものと云はれて居る『色里三所世帯』だといふ。其の用箋が面白いので、そんな紙は何處に賣つて居るかと問ふた所、いや賣つてはゐない、是は中村花瘦が持つて居た紙である云ふた。其頃紅葉館にお花と云ふ女がおりまして、大層肥つた若い女でした。それを紅葉君が好きで、花瘦といふ號をつけたことがある。その號を後に門人の中村に與へたが、中村は若死をしたので、紅葉は故人を偲ぶ爲めにその用箋を遣つてゐるのだと知れた。此の『色里三所世帯』と云ふものが、三冊ばかりの本で、是は誠に珍らしいものであり、殊に紅葉君の流麗な字で書いてありますから、私は是を借りて紅葉君の筆意に似せて寫し了つて、紅葉君に本を返却する時、君の所に君の書いたものがあつたからと云ふてごれ程の事もあるまい。俺のはまづいけれども、君の書いたものは自分にはほしいと云ふてこゝに交換することになつた。紅葉君が死んでから、或者があなたは紅葉さんに因縁があるからかういふものを持つて來たが、お買ひになりませんかと云ふて、持つて來たものを見ると、私の寫した『色里三所世帯』であつたので、それを紅葉の筆でないとも言ひかねて其儘戻したが、ごこかにそれが紅葉の寫本として珍重されてゐるかも知れぬ。

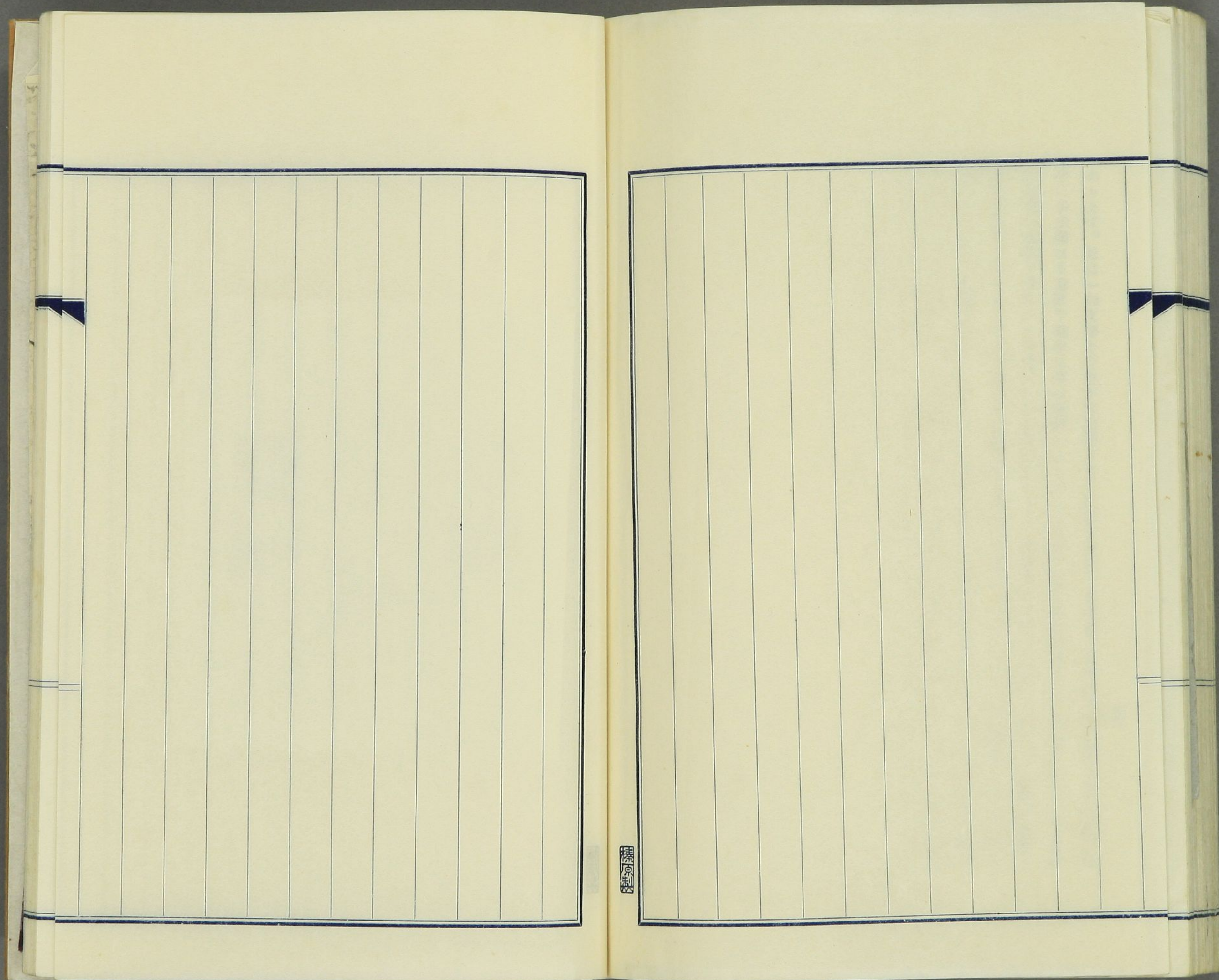
段々長くなりましたからもういゝ加減にしますが、一體紅葉君といふ人は趣味の人であつたと私は思つてゐます。いろ／＼の小説に婦人の服装を細かに書いてゐるのでもわかります。挿繪などにしてもそれ／＼おもしろい意匠がありました。此三越呉服店と紅葉君との關係なども思ひ起すのでありますが、當時の重役日比翁助君と關係がありましたやうな事から、紅葉の案で『ひも鏡』といふ商品目錄を發行したことがあります、あれなども紅葉君の意匠が籠つてゐます。何んにつけても意匠があつて面白い氣分がありました。殊に江戸趣味はあの人为天分に持つて居たので、意匠は頗る氣の利いたものでした。若しあの人長く存命で手元が豊かであつたら、どんなに發展したであらうか、不幸にして早く亡くなつた爲に、あまり自分の趣味性を發揮する事が出来なかつたのは、頗る遺憾であります。現にあの人が病を得て、不治の病氣に罹つた事を自ら知りつゝ、どんな事を案じたかと云ふと、自分の患部を繪葉書としやうとして圖案を作つて見たり、葬式の事なども、棺を蓮臺に載せて高く差上る事は氣持がわるいと云ふて駕籠に載せよと遺言したり、知人に配る蒸し物にも意匠を凝らし、重箱の蓋裏に紅葉の賀の香の巢の模様をつけたのも、皆紅葉君の案に依るのであります。紅葉君は印にも趣味があつてしきりに印を彫刻したのですが、不治の病を得て起たざることを知ると、記念の爲めと『化及我』の三字を刻させたなど、どんな場合でも趣味に離るゝ譯には行かなかつたので





あります。私は一向文學上の事で紅葉君と交つた譯ではありませんが、只此處で思ひ起しますのは、自分に多少備はる意匠や趣味は誰の薰陶によるのであるか、誰の感化によるのであるかといへば、私は紅葉君の感化を少なからず受けて居る様に思へます。勿論甚だ不束な人間でありまして感化力は幾ら大したものでもありません、私に及ぶ處は甚だ薄かつた様でもありますが、江戸趣味など、云ふ事に付きましては、此節こそ頻りにやかましく云ひますが、あの時分に於てはあまりさう今日の様に流行りもなかつたのでありまして、紅葉君が天分から自然の行動に發したかと思ふのであります。江戸趣味につきましても私は知らず、其感化を受けたに違ひありません。甚だ詰らん事を長く申し上げましたがこれで御免を蒙ります。(以上)





明倫彙編



以下  
13 丁  
白紙







